

挹婁の考古学

The Yilou Archaeology

大貫静夫

ONUKE Shizuo

はじめに

①魏志東夷伝の中の挹婁

②挹婁と考古学諸文化

③挹婁の考古学

④付論

【論文要旨】

挹婁は魏志東夷伝 Weizhi Dongyizhuan の中では夫餘の東北、沃沮の北にあり、魏からもっとも遠い地に住む集団である。漢代では、夫餘の残した考古学文化は第2松花江 Songhua Jiang 流域に広がる老河深2期文化 Laoheshen 2nd Culture とされ、北沃沮は沿海州 Primorskii 南部から豆満江 Tuman-gang 流域にかけての沿日本海地域に広がっていた団結文化 Tuanjie Culture に当てることで大方の一致を見ている。漢代の挹婁はその外側にいたことになる。漢代から魏晋時代 Wei-Jin Period に竪穴住居に住み、高坏を伴わないという挹婁の考古学的条件に符合する考古学文化はロシア側のアムール川（黒龍江 Heilong Jiang）中・下流域および一部中国側の三江平原 Sanjiang Plain 側に広がるポリツェ文化がよく知られている。北は極まることを知らず、東は大海に浜するという点では、今知られる考古学文化の中ではアムール川河口域まで広がり、沿海州の日本海沿岸部まで広がるポリツェ文化が地理的にもっともそれに相応しいことは現在でも変わらない。そのポリツェ文化はその新段階に沿海州南部に分布を広げる。層位的にも団結文化より新しい。魏志東夷伝沃沮条に記された、挹婁がしばしば沃沮を襲うという記事はこの間の事情を反映したものであろう。ただし、ロシア考古学で一般的な年代観を一部修正する必要がある。最近、第2松花江流域以東、豆満江流域以北に位置する、牡丹江流域や七星河 Qixing He 流域において漢魏時代の調査が進み、ポリツェ文化とは異なる諸文化が展開したことが分かってきた。これらの魏志東夷伝の中での位置づけが問題となっている。すなわち、東夷伝に記された挹婁としての条件を考えるかぎり、やはり既知の考古学文化の中ではポリツェ文化がもっともそれに相応しく、七星河流域の諸文化がそれに次ぎ、牡丹江流域の諸文化、遺存がもっともそれらから遠い。しかし、だからといって、これらを即沃沮か夫餘の一部とするわけにはいかない。魏志東夷伝の記載から復元される単純な布置関係ではなく、実際はより複雑だったらしい。

【キーワード】 挹婁、漢魏時代、鉄器、穴居、ポリツェ文化

はじめに

挹婁は魏志東夷伝の中では夫餘の東北、沃沮の北にあり、魏からもっとも遠い地に住む集団である。隣接する夫餘、沃沮、高句麗は言語、住居、習俗がほとんど同じで、挹婁だけが言語を異にし、穴居し、豆（高坏）を用いていないと記されている。

戦国時代以後、鉄器の普及に伴い極東の多くの地域で堅穴住居から平地住居への移行〔大貫1989〕が起こる。そのため集落遺跡の発見が難しくなる。だからこそ「常に穴居」する民である挹婁が東夷伝の中で目立つのである。「穴居」とは堅穴住居のことを指す。「常に」とあるのは、後の勿吉・靺鞨や民族誌時代のアムール川下流域の人々のように、冬だけ堅穴住居に住み、夏は平地の仮小屋に移るといった生活ではなく、通年で堅穴住居に住んでいたことを示すのであろう。

魏志母丘儉伝⁽¹⁾によれば、245年に魏は高句麗を討ち、逃げる王を追って沃沮を過ぎること千有余里で肅慎氏の南界に至った。この肅慎氏は北沃沮の北に接していた挹婁のことを指し、これによって初めて、挹婁についての詳しい情報が魏に知られるようになった。この時、冬でもないのに挹婁の人々は穴居していたから、「常」になのであろう。また、魏志東夷伝には漢代に挹婁が夫餘に臣属していたという記載があり、挹婁という集団はすでに漢代にはいたことになるから漢代併行期の遺跡もその対象となる。

以下の各所で言及するように、挹婁について中国やロシアの考古学者は早くから発言している。我が国でも以前からあるが、筆者〔大貫1998〕も言及したことがあるし、臼杵（2004）がより詳細に論じている。また、村上編（2000）『東夷世界の考古学』には、村上の他、中国、ロシア、韓国の研究者による論攷が収録されており、有用である。

①……………魏志東夷伝の中の挹婁

東夷伝の記事を検討する前に、漢魏時代の当該地域の考古学的研究はどうなっているのかを先に見ておく。図1では漢魏晋時代おおよそ紀元前2世紀から紀元後の3、4世紀頃までに残されたと考えられる遺跡を考古学文化別に記号化して示している。

老河深2期文化は漢代の夫餘の残したものと考えられており、その分布は第2松花江流域に限られている〔林2000〕。

挹婁は夫餘の東北千余里のところにあるという。魏志夫餘伝では夫餘は玄菟を去ること千里となっている。玄菟を現在の撫順市とすると吉林市まで直線距離で約310kmであるが、現在の道路では約500kmである〔田中2008〕。同高句麗伝では高句麗は遼東の東千里にあると記す。遼陽から集安までの直線距離は約250kmであるが、現在の道路では約520kmになる〔田中2008〕。魏晋時代の千里は約400kmである〔林1985〕から東夷伝に記載された距離はそれほど間違っていない。

吉林市から東北約400kmとするとその場所は佳木斯、双鴨山市の附近である。この付近には漢代から三国志東夷伝の時代を含む魏晋時代にかけて滾兔嶺－鳳林文化が広がっている。いずれも堅穴住居であり、高坏は漢代の滾兔嶺文化にはないが、魏晋時代の鳳林文化にはある。方角にすこし幅

②……………挾婁と考古学諸文化

(1) ポリツェ文化

ア 分布と地域性

図1で、回はポリツェ文化の遺跡を示す。主要な分布は松花江、ウスリー川（烏蘇里江）およびアムール川（黒龍江）中・下流域であり、地域的な変異を無視すればアムール川の河口部まで広がっている。アムール川やウスリー川の対岸である中国領内の三江平原にも広がっており、蜿蜒河類型と呼ばれている。ウスリー川に沿ってイマン川流域附近にも同じ内容のポリツェ文化の遺跡が見つかっている〔クラードイン他2001、白杵2001〕。

ポリツェ文化自体はアムール川中流から河口域、あるいは沿海州南部という広大な地域に広がっている。ポリツェ文化の遺跡はハンカ（興凱）湖より南の沿海州南部にもある（「回」）。それらは漢代の北沃沮が残した遺跡と考えられている団結（クロウノフカ）文化の遺跡（「▲」）と分布が重複しており、層位的にポリツェ文化の方が新しいことが知られている〔オクラドニコフ他1982〕。

かつてアンドレーヴァ〔Андреева 1977〕が沿海州南部のポリツェ文化（図4）に対して地域差を重視してオリガ文化という別の文化名を提唱した〔白杵1995〕。しかし、オリガ文化という別文化名を採用した場合、どこがポリツェ文化とオリガ文化の境界線なのか分からないことになる。そのため、ここでは白杵（2004）やプロジャンスキー（2000）のようにポリツェ文化と呼び、とくにその地域的な差異に注目する場合は、ポリツェ類型、オリガ類型と仮称する。しかし、オリガ類型とポリツェ類型には地域差の側面と時期差の側面があるようなのだが実際のところよく分からないので、積極的に使うことは避ける。あくまでも、オリガ文化という別文化名を付けることに反対するための仮の対処案に過ぎない。

以下ではアムール川中流域のポリツェ文化と沿海州南部のポリツェ文化の地域性に注意しながら見てゆく。

イ ポリツェ文化の編年

ジェレビャンコ〔Деревянко1976〕はポリツェ文化を3期に分け、1期をジョルティ・ヤル期（図2-1~4）、2期をポリツェ期、3期をケレレヴォ期とした。2期ポリツェ期は代表的な遺跡としてポリツェI遺跡（図2-5~15）とアムール・サナトリウム遺跡（18、19）があげられている。

アムール川中流域ポリツェ文化3期として設定されているケレレヴォ期については、後続する同仁文化とポリツェ期の間にはまだ空白があるという事実に基づく仮定の段階設定のようであり内容が不明瞭である。ポリツェ文化から同仁（=ロシアのモヘ「靺鞨」文化²）への遺跡形成が不連続であることが重要であろう。コチコヴァトカ遺跡の資料〔Деревянко1976〕（図2-20~22）がこの段階に相当するらしい。これらだけを抽出するならばケレレヴォ期の土器には沿海州のオリガ類型（図3）とほぼ同じ内容の土器が含まれることになるが、これらがアムール川中流域で主体的

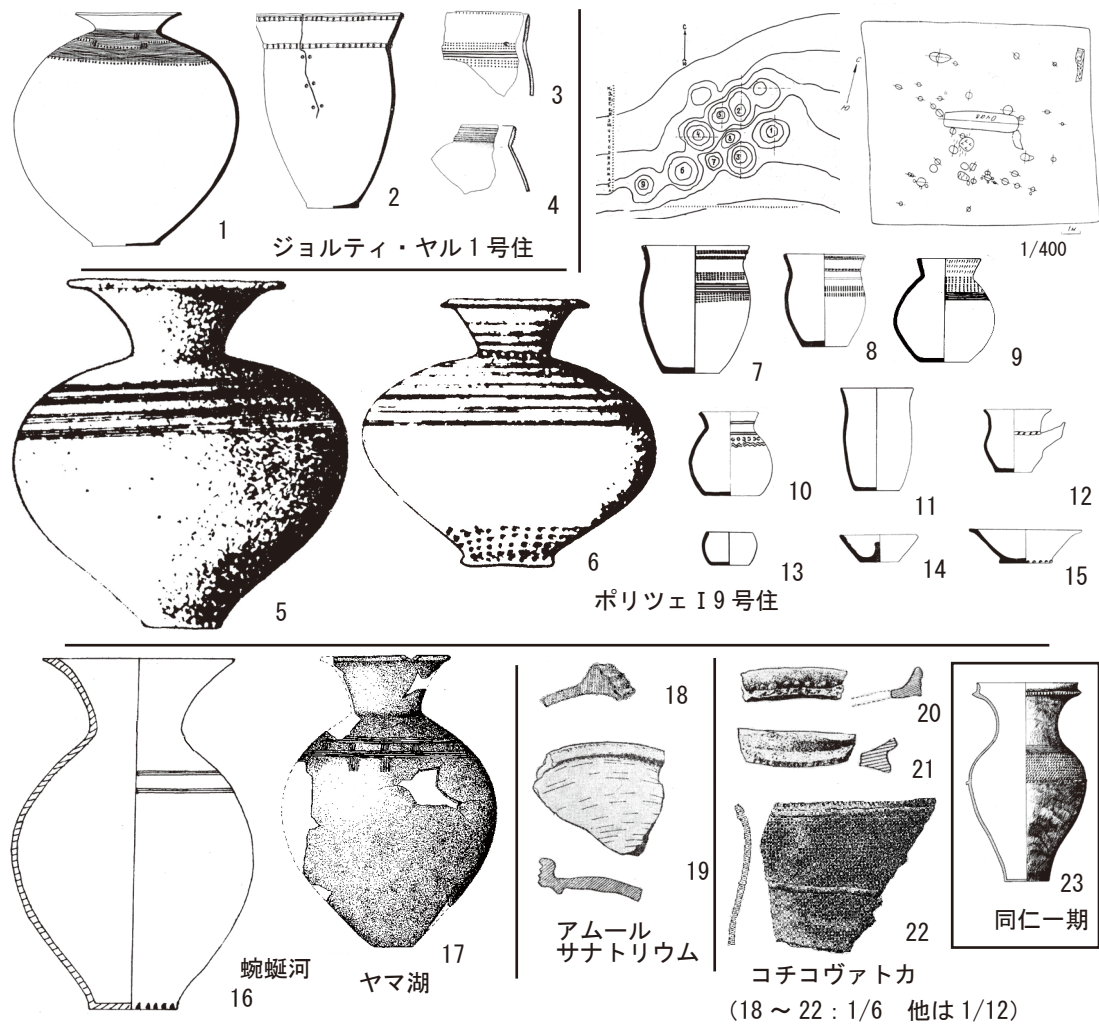


図2 アムール川中流域ポリツェ文化および関連する遺跡の遺構と遺物

な土器なのかが分からない。

沿海州のポリツェ文化では壺では大きく広がる口縁端が受け皿ないし子母口状になるもの（図3-1, 10, 12, 13）が特徴的である。

アムール川中流域では、このような口縁上端が子母口状になる壺はポリツェ I 遺跡には認められないが、アムール・サナトリウム遺跡（18, 19）およびコチコヴァトカ遺跡（20, 21）から少量出ている。ジェレビヤンコの編年に従えば前者が古く、後者が新しい。その後者の襟状の張り出しは白杵（1995）がすでに示唆しているように同仁文化最古段階の壺（23）の口唇部につながるもので整合的である。

ポリツェ I 9号住の壺（6）の口唇部は断面三角状に肥厚しているように見え、それがさらに外反して蛇腹状になるのがアムール・サナトリウム遺跡例と考えられよう。グラゾフカ [Коломиец 他 2002] の壺（図3-13）の口唇部は断面が三角形であり、アムール・サナトリウム例（18）に近い。グラゾフカの別の壺（14）はプロチカ遺跡 [大韓民国国立文化財研究所他 2005] の壺（11）に近い。アムール・サナトリウムの別の例（19）はよりプロチカ（図3-10）、シニエスカル（12）に近い。

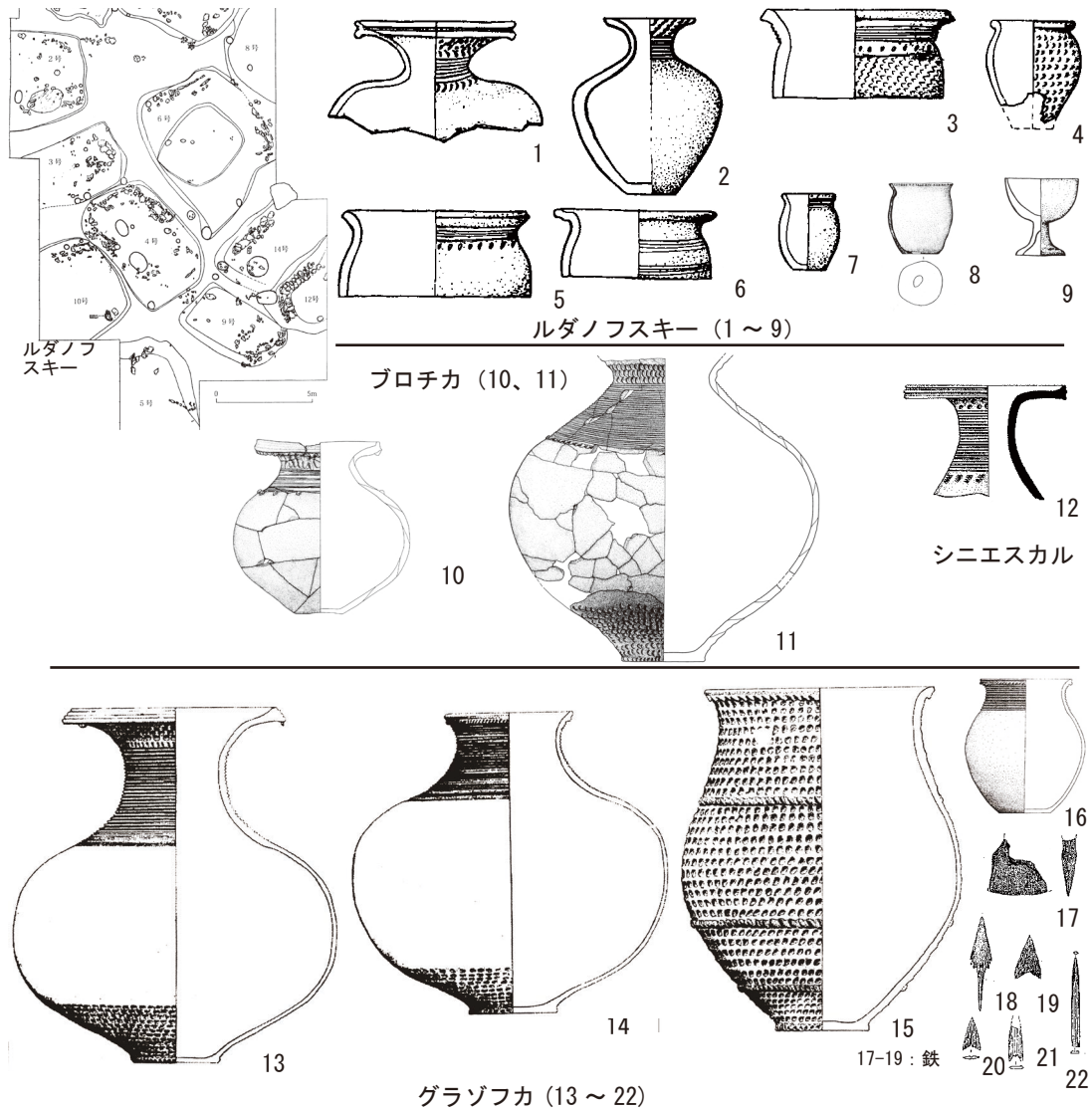


図3 沿海州ポリツェ文化(1~9は不明。17~22は1/6, 他は1/12)

口唇部の変化に基づく以上のような大型壺の組列が正しければ表1のようになる。

このような地域間の相対的な関係が正しければ、沿海州南部のオリガ類型は3期ケレヴォ期より古く2期新段階から始まることになり、ジェレビャンコが考えた3期から沿海州南部に広がるという理解と齟齬をきたすことになる。これは大別区分で2期をポリツェ I 遺跡段階のみとして、実体の不明なアムール・サナトリウム遺跡は2期から外し、3期の初頭とすればすむ話であり、ジェレビャンコが3期ケレヴォ期に沿海州南部に進出するとした理解はおおむね正しかったのであり、大別としては1, 2期の古段階と3期の新段階に分けて考えれば、以下で見る周辺地域の動きと同期させやすい。

団結文化の分布の北限はハンカ湖の東側ではウスリー川の最上流に位置する、クルグラヤー丘遺跡の附近のようである。ポリツェ文化の遺跡であるルダノフスキー遺跡がすぐ近くにある(図1)。ポリツェ文化を担った集団はその3期にウスリー川を船で南下してきて、それ以前団結文化が広

がっていた地域に広がり、さらに日本海沿岸地域まで広がった。ポリツェ文化の分布は綏芬河流域、ウラジオストク周辺までらしい。このポリツェ文化の及ばなかった地域の団結文化も土器編年からはポリツェ文化と交替した地域とほぼ同時期に終焉を迎えている [村上1987]。そしてこれに後続する考古学文化が知られていないのは無人化したのではなく、平地住居化したためであろう。例えば、擦文文化の終了した後の中世アイヌ文化の遺跡が分からなくなるようなものであろう。

ウ ポリツェ文化の年代

ジェレビャンコ [Деревяно1976] は2期ポリツェ I 遺跡の年代を3点の¹⁴C年代測定値がいずれも古いことに引きずられ、前6～5世紀とした。したがって、もう一つの2期を代表する遺跡とされたアムール・サナトリウム遺跡を2期でも新しい段階の資料として、その年代の下限は、下で触れる沿海州南部との関連から想定された3期のクケレヴォ期の年代との間に空白を生じさせないために紀元前1世紀になったのであろう。ジェレビャンコが3期を次の同仁文化と結ぶ段階として1世紀から4世紀としたのは、沿海州南部のポリツェ文化の年代や同仁文化の開始年代を考慮した上でのことである。

鉄器の年代から考えるとポリツェ I 遺跡に代表される2期ポリツェ期の年代は古すぎるとというのが我が国や中国の研究者の一致した判断 [中村1975, 加藤1980, 林1985など] であった。最近では村上(2000)がポリツェ I の鉄斧は2条突帯鑄造鉄斧の中でも最終段階のものであり、後漢代を中心に三国時代3世紀前半までの範囲に収まると述べている。村上の理解ではポリツェ I 集落は魏志東夷伝の時代に存在していた挾婁の集落そのものの可能性も出てくることになる。

この時期の2条突帯鑄造鉄斧の製作地はかなり限定されていたと考えられており、ポリツェ I の鉄斧だけを例外とする根拠が特になく、朝鮮半島 [金2002, 金2006] や日本列島での類例の普及が2世紀後半を中心とする頃であるという点がかつての中村や村上の理解以来大きな変更点はな

表1 ポリツェ文化の編年と地域性

	アムール川中流域	沿海州南部	アムール河口
	コチコヴァトカ (+)	ルダノフスキー	
3期 (クケレヴォ期)		↑?	
新段階	↑?	ブロチカ/ グラゾフカ	ズメイカ1 (+)
	アムール・サナトリウム (+)		
2期 (ポリツェ期)	ポリツェ I	団 結 文 化	スタラヤカ・コルマ (+)
古段階			
1期 (ジョルティ・ヤル期)	ジョルティ・ヤル		

いことを物語っており、重要な年代上の定点となろう。白杵（2004）も村上上の鉄器からの年代観を支持している。ただし、これらの中間の時期の変遷過程が明らかでないため、朝鮮半島や日本列島の諸例は下限年代を示すものとも言えよう。ポリツェ文化の第1段階は前漢代から紀元前後という、おおまかな年代が考えられる。

グラゾフカ遺跡から出ている、側面に鑄型の線があるようなので鑄造と見られる鉄斧（図3-17）は破片のため全体の形状がはっきりしないが、刃部が凸字状に広がっていたようである。刃部平面形が扇形から凸字状への変化は周辺地域では3世紀頃に起きる。このような流れからはポリツェⅠの鉄斧よりやや新しいことになり、土器からの先後関係と整合的である。

沿海州南部以南に広がる団結文化を沃土に比定するという動きと連動して団結文化の下限年代を新しく見る動きもありそうだが、少なくとも堅穴住居からなる団結文化は沃土あるいはその先行集団の残したものであるとしても、その下限は魏志東夷伝の3世紀中葉まで下ることはない。遺物を根拠とする団結文化の下限は前漢宣帝期五銖銭の伴出から前漢代後半の前1世紀までであるが、オクラドニコフ・プロジャンスキー〔Окладников, Бродянский 1984〕が中国や北朝鮮という周辺地域で進展していた研究の成果を参考に、前3世紀から後1世紀頃とした。この年代観が現状ではおおむね妥当なところであろう。

以上から、沿海州南部で団結文化からポリツェ文化への交替が起きた年代はポリツェⅠ遺跡の推定年代を重視するならば、2ないし3世紀頃の可能性が高い。

かつて東夷伝の倭国大乱という記事と弥生時代の高地性集落を結びつけて弥生時代の年代を決めるという誤りを犯した経験を生かすならば、東夷伝の記事によってポリツェ文化の南下した時期を決めることは慎重であるべきであろうが、魏志沃土伝に記された挹婁の襲撃というエピソードはまさにこのようなポリツェ文化の南進を背景にしたものであろうという想定〔白杵 2004〕は上での編年の再検討でも支持する結果となりそうだ。それまで臣属していた挹婁が夫餘に叛旗を翻したのは黄初年間（220～226年）とされており、公然と叛旗を翻す以前からあったであろう夫餘との軋轢とこの沿海州への南下は連動している可能性もあろう。日本列島で弥生時代から古墳時代への大きな変動があった頃、東北アジアの周辺地域でも大きな変化があったのである。

エ ポリツェ文化の終末について

白杵（2004）が注目した、襟城の張り出しのある口縁部を持つ沿海州のオリガ類型の壺のようなものがアムール川中流域のクケレヴォ期（図2-22～25）にもあることに注意すると、ポリツェⅠ9号住の図2-6の壺は頸部にも横走条線が及び、かつ底部に刺突列文が廻る点で沿海州のグラゾフカの壺（図3-24, 25）に繋がっている。他方、同じ9号の別の壺（図2-5）は胴部上半のみに横走条線がめぐる点で、楊・林（2006）が3期クケレヴォ期併行頃としている蜿蜒河遺跡〔黒龍江省博物館ほか 2006〕の壺（16）やそれによく似た、アムール川のさらに上流、ブラゴヴェシエンスク附近のアンドレエフスキー丘遺跡群ヤマ湖遺跡〔Болотин 1999〕の壺（17）に繋がる。つまり、ポリツェⅠの段階の二種の壺はそれぞれ別の地域で分かれて発達したように見える。その結果としての子母口状の口唇部を持つ壺と蜿蜒河・ヤマ湖のような長胴の壺がアムール川中流域で融合して成立したものが同仁文化一期前半（＝ブラゴスロヴェノエⅡ式）の壺（図2-23）であるという

成立過程を考えてはどうだろうか。この仮説が認められるならば、同仁文化最古の段階の壺がハバロフスク周辺の三江平原だけで見ついているという現状の説明になるであろう。魏書勿吉伝でその地が松花江流域と見られていることと整合的である。この場合、問題となるのは三江平原以外で同仁文化の分布する地域、たとえば沿海州南部が問題となるが、それは本稿の主題からは逸脱するので省略する。

オ 立地

アムール川中流域にあるポリツェ I 遺跡はアムール川支流の旧河道の沼に沿う高さ 3～4 m の微高地に約 20 軒の竪穴の凹みが密集して分布していた。1 期の竪穴住居が調査されているジョルティ・ヤル遺跡では川に沿って 30 軒以上の竪穴住居が密集して分布していた。蜿蜒河遺跡はアムール川（黒龍江）と松花江が合流する地点で二つの大河を結ぶ蜿蜒河西岸の台地上にある。これらアムール川中流域の遺跡は大河沿いではなく、3 本の大河から形成された平原で大河に注ぐ小河川に沿って立地しており、周辺には低湿地が広がっている。サケ・マスを始めとした内陸河川漁労に重点をおいた遺跡立地である。馬の飼育に向いていそうだが、貂などの狩猟場所からは離れている。

これと異なり、沿海州ウスリー川の支流であるビキン川やイマン川流域のポリツェ文化の遺跡は狩猟にも適した険しい山林の中にあり、しばしば部分的な土塁がめぐっている。ウスリー川を挟んだ中国側の七星河流域に同時代に展開した滾兔嶺文化の遺跡群にも同様の状況が認められている。舌状台地の先端に集落を営み、天然の要害である崖側には土塁を作らず、台地の奥側に部分的に土塁および付随する壕を設ける。ポリツェ文化内のウスリー川流域の両岸に共通する地域性としても、それが 3 期だけの特徴なのかまだよく分からない。

沿海州の南部でも険しい舌状台地の先端のほか、ルダノフスキー遺跡のように低湿地に囲まれた独立丘上に立地する例がある。一部には土塁が認められているが、後世のものか不明であるという [プロジャンスキー 2000]。

魏志東夷伝に記された山が多くて険しいというのは、アムール川中流域などの三江平原側ではなく、魏軍がその南界に至った沿海州側の状況を表しているのであろう。

カ 集落と住居

アムール川中流域のポリツェ I 遺跡全体では約 20 軒の竪穴の凹みがよく残っており、その中の 10 軒の方形竪穴住居を調査している (図 2 中段上)。とくに 9 軒は密に分布しており、すべてが同時存在していたとは考えにくい。土器の様相も異なる住居があり、時期差とすれば同時存在した住居址は発掘資料で 5 軒以下、全体では 10 軒以下の可能性がある。

全体の構成は確かではないが、約 130㎡から 100㎡という大型住居が 4 軒、90 から 70㎡の中型住居が 2 軒、約 40～50㎡の小型住居は 3 軒である。大型の方が多いので、この規模の大小が社会のピラミッド型の階層化を単純に反映するとは考えにくい。ほかの遺跡に知られる 100㎡を超える大型住居は何れもポリツェ文化の 1 期に属する遺跡のものであり、大型の住居が多い先行するウリル文化と変わらず大型住居は多人数居住を反映していると想定される。しかし、アムール・サナトリウム遺跡の住居は 10㎡に満たないものが多そうだし、3 期段階に近い蜿蜒河遺跡の住居も約 30㎡

である。やはり3期段階とされる沿海州南部の住居を見ても、マラヤ・パドシェチカ遺跡では9～16㎡、ルダノフスキー遺跡では10～35㎡と小規模であり、ハバロフスク周辺ポリツェIのとは大きく異なる。したがって、大型住居がポリツェ文化の全時期、地域を通じた一般的な住居とすることはできず、全体に小型化の傾向が見える。また、住居軒数がそのまま集落ないし人口規模を反映するとは限らないし、規模に大きな格差がないことを注意しておく必要がある。

沿海州南部の住居は団結文化の系譜に属する祖形炕を取り込んだ方形ないし長方形の竪穴住居(図3上段左)が特徴的であり、ハバロフスク周辺の中央に炉を持つ方形竪穴住居とは構造が異なる。祖形炕はポリツェ文化が南下した段階で団結文化から取り込んだ要素であるから、魏軍が遭遇したときの挹婁の南界の住居「穴居」が祖形炕の付いた竪穴住居であった可能性もあるが確かではない。

ポリツェI遺跡では住居の間から貯蔵穴が見つかるが詳しいことは分からない。沿海州のグラゾフカ遺跡でも長方形の貯蔵穴があり、中からは多くの土器や樹皮製容器そして一部は樹皮製の容器に入っていた穀物が見つかる。壁際の本製構造物や白樺樹皮が火を受けて焼けていたことから、長期に密封した貯蔵穴ではなく、地下式の貯蔵庫のようなものだったらしい。

キ 土器

アムール川中流域では大小の壺と甕、そして碗ないし鉢が基本である(図2)。高坏はない。鉢には蓋になるものが含まれているのであろうが、いずれがそれか特定するのは難しい(15)。燭台とされるもの(14)は落とし蓋を含む可能性もあろう。先行するヤンコフスキー文化の球状胴部に外反する小さな口頸部が付くものからの変化で、しだいに口頸部が発達する(1, 5, 6, 16, 17)。ポリツェI遺跡ではこの大型壺の中からキビが見つかり、この大型壺の主な用途として穀物の貯蔵があった。

沿海州(図3)の場合、ルダノフスキー遺跡の土器の組成[Бродянский1987]では、口径が40～50cmになるポリツェタイプの大型壺(1, 2)が22%ある。甕ないし深鉢(3～8?)が69%ある。碗が6%ある。これらアムール川中流域と共通する器種が全体の97%であり、特に壺と甕でほとんどを占める。このほかに沿海州南部のポリツェ文化では高坏が伴うと言われている。ルダノフスキー遺跡では2%あるとされている。このことはハバロフスク周辺との大きな違いであり、東夷伝の中の挹婁は高坏を用いないことが周辺集団との大きな違いとして強調されているので、祖形炕とともに団結文化からつながるものとされている高坏があることは見過ごせない。しかし、クロウノフカ文化の住居とともに多数のポリツェ文化の祖形炕付き住居が調査されたプロチカ遺跡でも確実にポリツェ文化に伴う高坏はなさそうである。沿海州南部において先行するヤンコフスキー文化や団結文化では高坏は土器の中でより重要な役割を担っていたようだが、ポリツェ文化ではそのような状況を見て取ることができない。高坏ゆえに沿海州のポリツェ文化オリガ類型全体を挹婁から除外すべきではないと考えておく。

ク 道具の鉄器化

ポリツェI遺跡から出ている鉄製品は、夫餘に比定されている第2松花江流域吉長地区老河深墓地の副葬品に類例があり、夫餘との交渉関係の中でもたらされたものであろう(図4)。ただし、

その年代が老河深中層墓の推定年代である紀元前後の時期より遅れるであろうことは上で述べた。

その夫餘の鉄器について、東（1999：44）は、鑄造技術自体はすでに保持していたが、鉄製農工具が中原、遼西、遼東郡の鉄器と共通するところから自製品ではなく、交易で入手していたと考えているので、夫餘は中間交易を担っていた。ただし、武器には独特の型式があり、在地製の武器の存在を考えている。

2条突帯鑄造鉄斧は中国では老河深例も同様であるが「鏹」と呼ばれる鍬のような土掘り具と考えられることが多いようである。ポリツェI遺跡では住居内の出土にかかわらず、石器時代以来の主要な道具である、伐採、加工用の磨製石斧（5）の代替品としては他に鉄製の簡単な板状の斧（2）しか無いのに、鑄造製の耕具には立派なものがあるというのは不自然と言わざるをえない。白雲翔（2005）は機能分別には困難が伴うという前提をつけてはいるが、一般に土掘り具「鏹」とされている鑄造製品の多くを斧ないし手斧としている。とくに2条突帯のあるものは両刃のものが斧で片刃は手斧であるという。白によれば漢代には多数の鉄製工具が存在したことになる。厳密な分別は不可能という前提で筆者もこれに従いたい。

野島（1992）や村上（1994, 1995）がすでに指摘するように、袋状鑄造鉄斧は壊れやすかったら

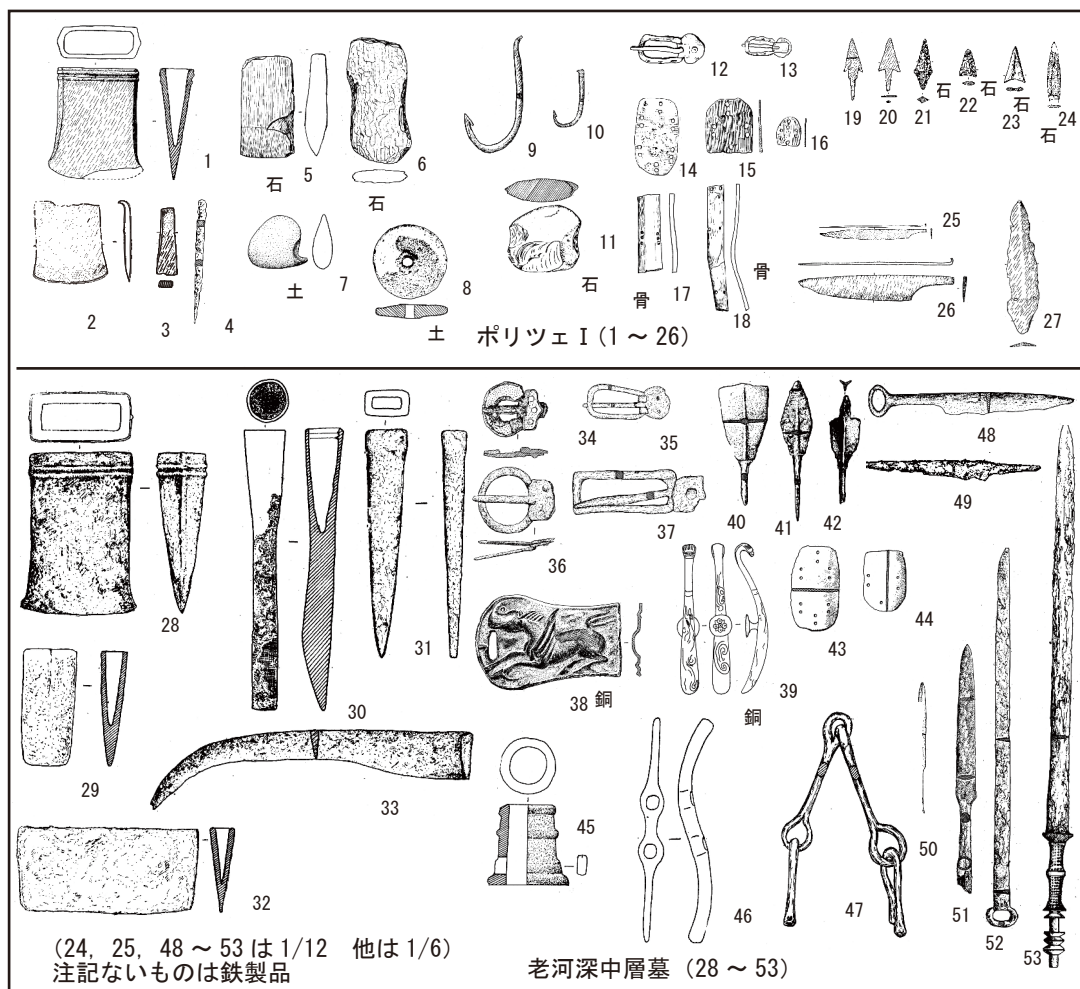


図4 ポリツェ文化および関連する遺跡出土の鉄製品他の遺物

しく、ポリツェ I 遺跡でも小型の板状鉄斧などには袋状鑄造鉄斧の破損品を利用した再加工品がかなり含まれているのであろう。

鉄製の鎌や槍は狩猟具にも武器にもなるが、鉄製及びそれを補完する骨製の甲冑小札が多くあることから戦が頻繁にあったのであろう。多量に必要な鉄鎌は老河深 2 期文化のような大型な鑄造品ではなく、小型で断面菱形だがより扁平なもの (19) と扁平な素材を再加工したようなもの (20) の二種がある。前者の鑄造品らしきものの産地は不明だが、後者は明らかに在地的である。

先行するウリル文化に比べると磨製石斧が減少しているのは、より鉄製品が普及していたためなのであろう。しかし、鎌では磨製、打製の石製鎌や骨製の鎌も多く作られている。老河深の墓の副葬品としての車馬具 (45～47)、剣 (52, 53) がポリツェ I 遺跡で見つかっていないのは集落遺跡という側面もあろう。ただし、馬車は元来無かつたろう。

沿海州南部の鉄器として、ルダノフスキー遺跡 (プロジャンスキー 2000: 第 25 図) やマラヤ・パドシェチカ遺跡上層 [Андреева1977:166] では、鑄造斧のほかに、その再利用品の船底状の鑿 (?) が目立つ。再利用されたものの形状からは元の斧はポリツェ I 例のような断面六角形扇形刃部の斧ではなく、断面長方形で直刃の斧らしい。すでに上で述べたように鉄器の入手が容易ではなかったことを物語るのであろうし、その入手経路も問題となろう。

ルダノフスキー遺跡では鉄鎌のほか磨製石鎌や骨鎌もある。ポリツェ I 遺跡の鉄鎌は、茎の途中に段が一段付くもの (図 4-19) と段が付かないもの (20) という上述の二種の有茎鎌が基本である。それとは異なり、グラゾフカ遺跡の鉄鎌は返しが複数段あり、鋸歯状になる有茎鎌 (図 3-18) と凹基の鎌 (19) からなる。このような鉄鎌の組合せはポリツェ文化の地方的な製品なのであろう。

ルダノフスキー遺跡では茎の短い長めの刀子が多く出ている。ほかに、複合遺跡のため時期判定に問題はあつたものの、マラヤ・パドシェチカ遺跡上層では鉄製小札が出ている。

ケ 生業

夫餘と想定される老河深 2 期文化との違いで言えばポリツェ I 遺跡では鉄製農具 (図 4-32, 33) は出していない。農具では石製土掘り具 (6) があるが数は少なく、収穫具は先行するウリル文化および後続する同仁文化でも石製品すら持たない。しかし、ポリツェ I 遺跡の焼失家屋から大型壺に貯蔵されたキビが出ているようにある程度の農耕はおこなわれていた。沿海州南部でも、先行する団結文化では鉄製の鋤先、穂摘み具、鎌があり、農具の鉄器化が進んでいたが、ポリツェ文化にはこれら鉄製農具は引き継がれていない。耕具と異なり、収穫具は木器化では説明しにくい。より寒冷な自然環境という制約の中で、ポリツェ文化は団結文化に比べ生業の中で農耕の占める割合はより低かつたと筆者は理解している [大貫 1998]。

家畜ではブタが主だがウマの骨も出ている。1 号住居内の長方形貯蔵穴内から、おそらく骨器の素材として貯蔵されたヤギの肢骨がまとまって出ている。

狩猟動物ではノロの骨が出ている。ノロはシカ類の中でも比較的草原を好む傾向にある。石錘や釣り針が用いられた河川漁労による魚骨も出ている。遺跡の立地から見てもアムール川中流域のロシア側も中国側も平地地帯であり、狩猟に適した立地とは言えず、ウマ、ヤギの飼育や河川漁労に適した立地である。ウスリー川の支流であるビキン川やイマン河流域にあるポリツェ文化の遺跡

は森林地帯にあり狩猟に適していて、当該地域では毛皮獣猟が現在でもおこなわれている [佐藤編 1998, 大貫・佐藤編 2005]。

沿海州出土の栽培穀物を集成している小畑 (2008) やセルグシェーワ (2005) によれば、確実なポリツェ文化オリガタイプの穀物としてはグラゾフカのアワのみである。より北方に分布の中心があったポリツェ文化で、たとえその南縁部にしてもどのような穀物栽培がおこなわれていたかは文化的な問題として検証する必要がある。

沿海州ポリツェ文化の家畜については、層位的な分離がどこまで信頼できるか分からないマラヤ・パドシェチカ遺跡上層で全体の 30% がブタ、20% がウマ、17% が大型有角獣 (ウシか?) であり、これらの家畜動物が全体の 67% を占めていた。先行するヤンコフスキー文化、団結文化に比べると、家畜動物の割合が増える中で、ブタの割合が減り、ウマ、ウシ? の割合が増えている。アンドレーヴァ [Андреева1977] は先行する段階では家畜はおもに食料用として飼育されていたが、ポリツェ文化では農耕用の使役動物としての役割が重要になってきたのであろうと述べ、農耕の発達を重視している。この評価についてはほかの遺跡での再検証を必要としている。

(2) 滾兎嶺－鳳林文化

ア 分布と年代

滾兎嶺文化 (図 1 の□) は ^{14}C 年代と古銭により前漢から後漢にまたがる時期と想定されている。鳳林文化 (◇) は漢代に比定されている滾兎嶺文化より層位的に新しいということとともに、後続する同仁文化を南北朝時代以後とすることから、その間の魏 (220～265) 晋 (265～420) 時代と推定されている。まさに魏志東夷伝の時代であるが、滾兎嶺文化から鳳林文化への移行は漸移的であり、漢と魏の切れ目なのか保証はなく、存続期間も目安に過ぎない。

七星河流域を中心とする三江平原には滾兎嶺文化およびそれに後続する鳳林文化に属する遺跡が多数あり、七星河流域だけですでに 426 カ所の遺跡が見つかっている。ただし、そのほとんどは地表調査による確認に過ぎず、連続する二つの文化である滾兎嶺文化と鳳林文化に分けて遺跡分布を述べるのは難しい [黒龍江省文物考古研究所 2000, 同編 2004]。

その二つの連続性の強い文化は、その前後の時代の遺跡はよく分からず、きわめて限られた時代に花開いたのであった。ポリツェ文化を始め、隣接する諸文化 (図 1) もほぼ同じ継続期間に相当する。その後、隣接地域はしばらくすると同仁文化が広がるが、七星河流域には広がることはなかった。なぜ、七星河流域にこの期間だけ突然大きな集団が現れ、また消えたのかは解明されていない。今でも湿地の多い流域がその間だけ減少していたのであろうか。

滾兎嶺文化の南限は団結文化の分布の北限とも関連している。綏芬河流域までは中国側、ロシア側とも典型的な団結文化の分布範囲で問題はないが、それより北では、ロシアでは興凱湖西岸のセミピャトナヤ遺跡が北限の遺跡として知られている。中国側では未報告資料ではあるが、穆稜河流域の穆稜小四方山に団結文化には珍しい城址があり、そのすぐ下流の鶏西市以東では滾兎嶺文化と団結文化両者の遺物が出ており交錯しているという [賈・魏 1989]。林 (1985) はその地域の鶏東保安遺跡を団結文化北限の遺跡の一つとしてあげている。セミピャトナヤ遺跡のその後の調査資料

によれば、滾兎嶺文化に特徴的な角状把手付き鉢が伴っており、かつ小さいながら団結文化に特徴的な切り株状把手付きの甕もある[金2007]。あるいは後述する牡丹江下流域の東興文化(図1の△)の南限として捉えるべきかも知れない。それぞれの考古学文化が截然と対峙していたわけではなく、漸移的な境界であったらしいことは集団間の関係を考える際に注意される。

鳳林文化の分布の中心は七星河流域および安邦河流域であり、滾兎嶺文化の分布よりやや狭くなるらしい。

イ 集落

滾兎嶺文化から鳳林文化にかけて、一部では周囲に土塁あるいは壕を伴う、堅穴住居からなる集落が七星河中上流地区にきわめて高い密度で存在していたことが分かっている。少数の城址と多数のそのほかの一般集落遺跡からなる13の遺跡群のうち、最大の遺跡群は50遺跡からなる。

城址と呼ばれるものは中原系の方形土城とは異なる、円形、楕円形に類する不整形な形状が多い。夫餘伝でも円形の城柵を作るという記事があるように、北方の特徴なのであろう。山城が多く、平地のものは少ない。そのうちもっとも多い防御用の城址とされるものは、大きく、集落全体ないし大半を塁、壕で囲むもの、一部だけを囲むもの、そしてそれらの複合するものの3種類に分けられる。

滾兎嶺文化期の代表的な例として、安邦河流域の滾兎嶺遺跡[黒龍江省博物館他1996]がある。舌状台地の先端に、地表上の凹みから推定される約50軒の堅穴住居からなる集落がある。三方は川で囲まれた断崖であり、唯一開いている西側だけを壕とそこから出た土で築いた土塁で区画しているだけである。このように自然の崖と局部的な塁を組み合わせた「城址」はほぼ同時期にウスリー川を挟んで両側の支流域に広がっていたのである。

滾兎嶺遺跡では東西に高さ3m、直径40～50mの円形の平台があり、それぞれその上に堅穴住居が営まれていた。平台の上の住居とその周辺の堅穴住居の間では大きな差はないが、集落内の住居間にある程度の階層差があったことをうかがわせる(図5下段)。

滾兎嶺遺跡で調査された堅穴住居は大型100㎡、中型60～70㎡であり、小型は25㎡前後のもの1軒だけである。中型に属す滾兎嶺7号住居(図6下段)は面積約60㎡で、壁の高さは80cmあった。住居の規模の点では沿海州のポリツェ文化の小型住居よりアムール川中流域のポリツェI遺跡の住居に近い。地域を越えた社会の時間的な変化を反映しているようである。

鳳林文化の鳳林城址[靳他1999, 黒龍江省文物考古研究所2000ab]は複雑に土塁がめぐり9つの城區に分かれ、総面積120万㎡になる七星河地域最大の規模の遺跡である(図5上段)。とくに注目されるのが、鳳林城址の中でもっとも新しい段階であり、中央に位置する、周長490mで四壁に馬面を有する方城(7区)である。周囲には壕がある。門が確認できず閉じた城であり、普通の内城ではない。また、鳳林文化の城址としても馬面を持ち城壁平面形が角張る点で保安村城址[黒龍江省文物考古研究所2003]とともに鳳林文化の城址では例外的な城址である。7区の方城が確実に鳳林文化期のものか疑問が残るが、この七星河流域では鳳林文化以後、清代に至るまで活動の痕跡がないという事実もある。したがって、やはり鳳林文化の末期にはこのような大規模な城址が存在したのかも知れないが、例外的であるという事もまた事実である。その7区方形土城を除外するとしても、それ以外の堅穴住居集落の周囲を囲う不整形な城壁はすぐ南に位置する炮台山城址に

もあり、鳳林文化の中で最大規模の平地の城であるという点はやはり重要であろう。

滾兔嶺・鳳林文化の大半の遺跡は三江平原を望む山地の縁に沿って広がっている。そこから、七星河に沿って三江平原の平地部に細長く、間隔を広げながら平地の遺跡が連なっている。その平原部の集落群と山地部の集落群の接点にある城が鳳林城址であり、炮台山城址である。それゆえにこの遺跡群の密度は低くとも、七星河流域遺跡群の中心として相応しい。巨大な平地の城と山城が一对であることには、高句麗の平地の城と山城というペアと同じような意味があるのかも知れない。

鳳林文化典型期の鳳林城址の住居では全体に小型化し、カマドが付く祖形炕が室内に導入された住居(図5上段)が現れる。最大でも25㎡で小型化している。このような変化の方向は沿海州ポリツェ文化での住居の小型化、そして祖形炕の導入と連動している。

小八浪遺跡の位置する安邦河流域では現在でも平地はしばしば川の氾濫が起こっている。おそらく七星河流域も同様で、平原部は農耕に適しても居住地としての安定性に欠けていたことが、集落が山地縁辺部に多い理由であろう。

滾兔嶺・鳳林文化は、東は七星河がウスリー川に注ぎ、北は安邦河が松花江に注ぐことでポリツェ文化の分布域と河川交通でつながっている。防御用の城壁は何のためかと言うことを考えるのだが、両者間に抗争があったのであれば、七星河の下流にもう少し城址があつてよさそうだがない。この地には現在でも湿地が広がっており、密接な交渉はなかったようだ。

ウ 土器

滾兔嶺文化の土器は貯蔵用と考えられる大型の広口壺、胴部に角状把手が付くものを含む甕(罐)、肩または胴部に角状把手が付くものを含む碗、鉢などからなる(図5-38~45)。盛食器として鉢、碗が発達するが、高坏はない。

鳳林文化古段階の保安村城址[黒龍江省文物考古研究所2003]の土器(図5-25~36)は角状把手付きの罐(28)や鉢(36)や2種の大型の壺(25,26)など滾兔嶺文化の土器との連続性が強い。他方で、多孔の甑(32)や高坏(34)や彩色文様の付く碗(30)が現れる。滾兔嶺-鳳林文化移行期の保安城址の住居は規模、柱穴配置とも滾兔嶺文化とよく似ている。土器とともに滾兔嶺文化との連続性をよく示している。

新段階の鳳林城址の土器(1~11)では滾兔嶺以来の角状把手付きの土器が消える一方、他方で保安村から現れる器種は継続する。保安村城址の段階は鳳林文化の古段階とも、滾兔嶺文化との移行期の段階とも言えるのであり、両文化は連続性が強い。

鳳林城址では祖形炕付きの堅穴住居からポリツェ文化の土器と同類である異系統の土器(2,3)が出ている。祖形炕付き住居やポリツェ系土器は保安村にはないから、ポリツェ文化との接近は鳳林文化でも後半段階の現象である。ただし、ポリツェ文化系の大型壺は受け入れず、大型壺(1)は滾兔嶺文化以来の系統のものである。

角状把手付きの罐や鉢の変化の対応からアムール川中流域では古段階2期が滾兔嶺文化段階に、新段階3期が鳳林文化新段階に併行する可能性が高い。保安城址が古、新段階の移行期に相当する。

エ 道具の鉄器化と生業

滾兔嶺遺跡（図5下）では、袋状のソケットのある鍬（46）、鏝（47）、刀子（52）、甲冑小札（51）が出ている。滾兔嶺からも小八浪からも磨製石斧が出ていないことから、鉄斧の普及が推定される。しかし、鍬には磨製石鍬（48）、打製石鍬（49）があり、植刃用らしき両面調整石器があるなど、利器の石器から鉄器への転換はあまり進んでいない。このような状況は沿海州のポリツェ文化とよく似ている。

石包丁（50）とすりうすがあり、滾兔嶺遺跡ではオオアサガ、小八浪遺跡では種類は不明だが、炭化穀物も出ている。小八浪遺跡では、野生のノロのほか、家畜のブタやウマの骨が出ている。ブタの下顎骨が墓に副葬されている。

鳳林文化新段階（図5上）では鉄製の鍬（13）、刀子（19、20）、甲冑小札（18）のほかに斧（12）が出ている。石鍬が無くなり、骨鍬（14、15）や骨製匕首（17）がある。滾兔嶺文化に見られた剥片石器加工システムは鉄器化により消滅した。骨製の鉸具（24）もある。鉄器の不足する部分は骨器が補完している。石包丁（16）もまだあり収穫具の鉄器化は起こらなかったし、すりうすもある。

ウシの肩胛骨を用いたト骨があることから、鳳林文化の段階ではウシが飼育されていた。

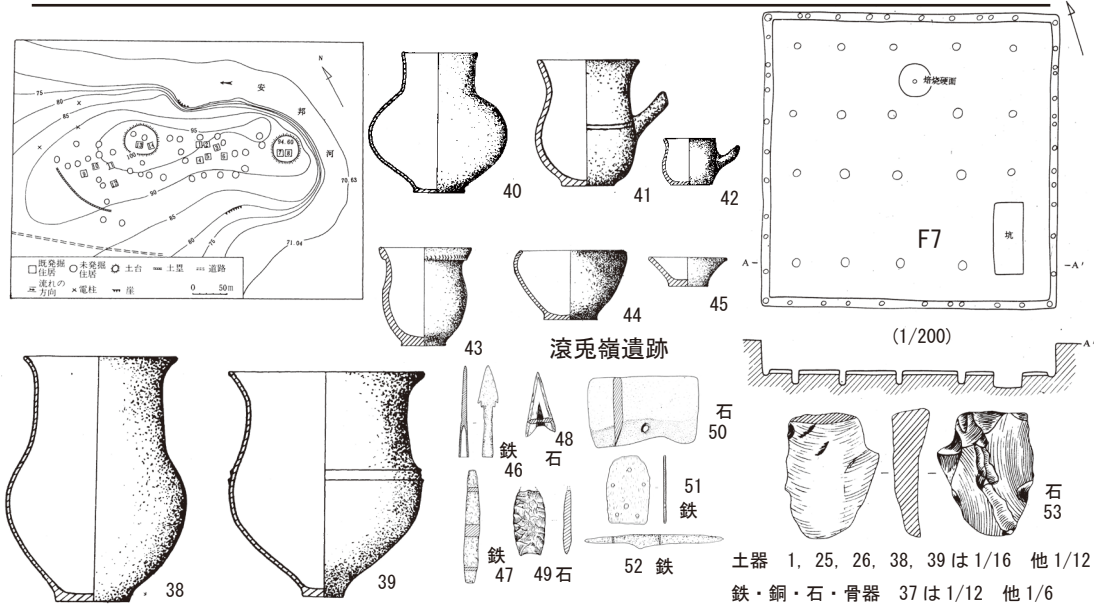
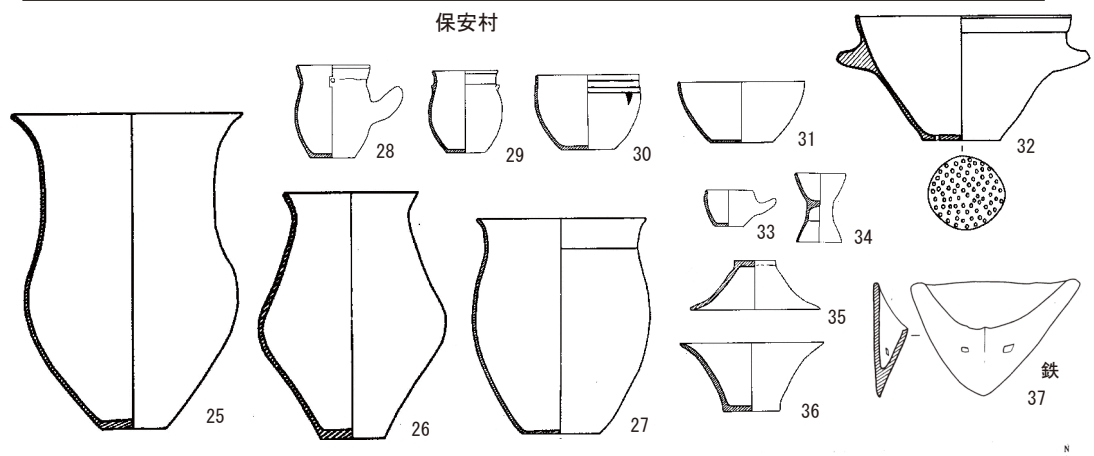
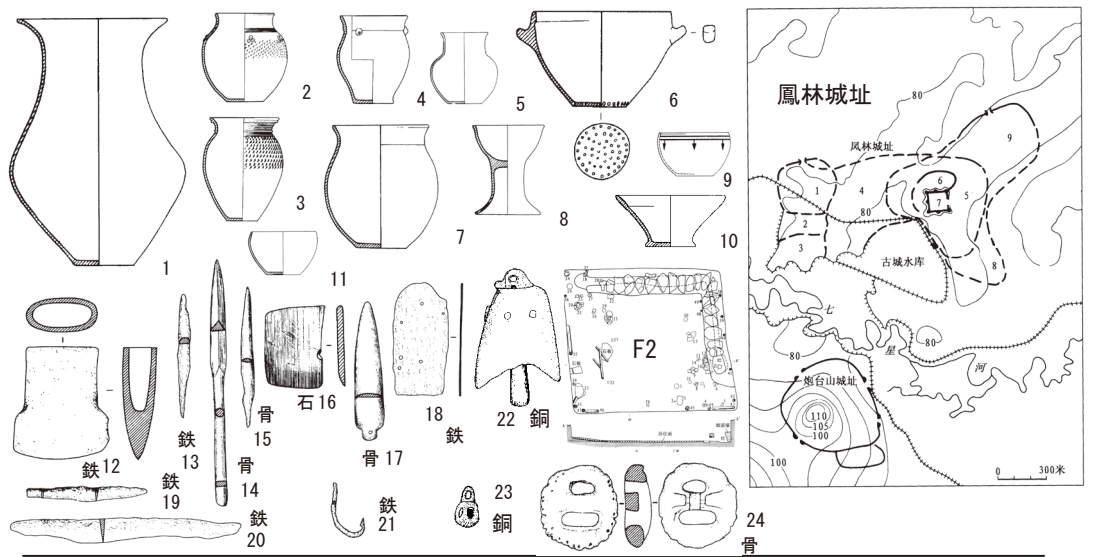
滾兔嶺－鳳林文化移行期の保安村城址からは鉄製の犁（37）が出ており、ウマあるいはウシを利用した耕作がおこなわれていたのであろう。小銅鐸はこれらの家畜用であろうか。滾兔嶺文化からさらに農耕が発達していることを物語る。道具組成から見ると、ポリツェ文化より農耕への依存度は高かったと考えられる。

筆者〔大貫1998〕は東北アジアの遺跡から出土する動物骨においてシカ類などに代表される野生狩猟獣とブタ（および一部家畜との識別の難しい野生イノシシを含む）などの家畜の割合の変化が生業の変化を反映することを示したことがある。滾兔嶺文化に属する小八浪遺跡ではシカ類が家畜ブタを多く含むはずのイノシシ類よりはるかに多いが、団結文化の茂山虎谷遺跡では逆にイノシシ類がシカ類より多い。このことは少なくとも、滾兔嶺文化段階では団結文化に比べ、農耕が生業中に占める割合は低かったことを物語るのであろう。

（3）牡丹江中流域の東興文化と河口遺存

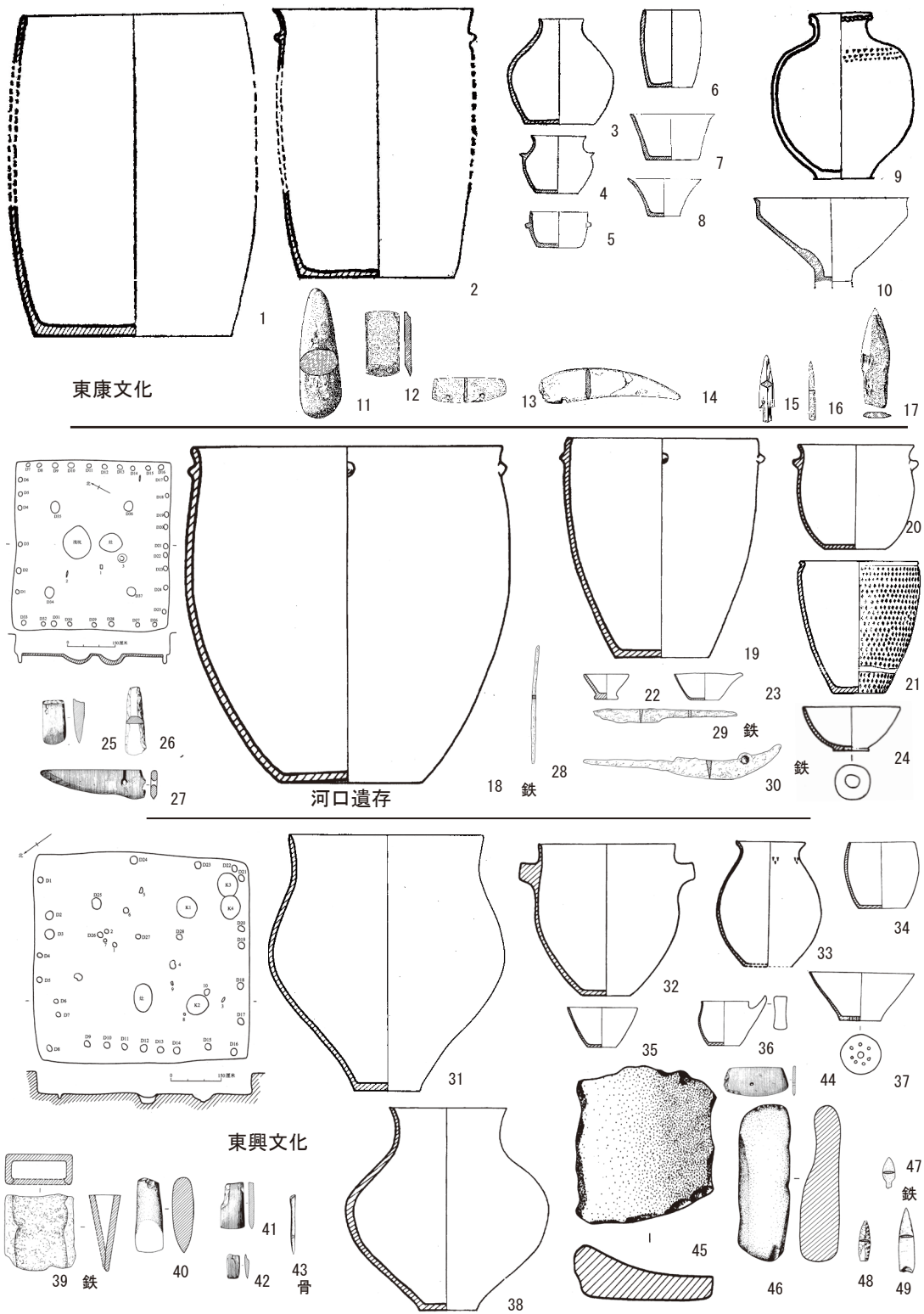
図1の遺跡分布に見られるように、漢魏時代の牡丹江流域では、より上流に東康文化（▼）があり、より下流に東興文化（△）、そして最近仮称された、東興文化より層位的に新しい河口遺存（▽）がある（図6）。さらに牡丹江が松花江に注ぐ合流点付近に橋南2期遺存（△）がある。

これらの牡丹江流域の諸文化、遺存の相互の関係の基本となるのは、東興文化→河口遺存という2段階である。また、東興文化の切り株形把手（32）は団結文化の把手と関係し、同時期と考える。角状把手という共通性から橋南2期遺存〔李硯鉄他2000〕は東興文化（36）と同一の段階でかつ、ポリツェ文化ポリツェ類型、滾兔嶺文化から鳳林文化前半期に併行する。河口遺存の乳状突起（18～20）は東康文化の土器（2）と共通する。この乳状突起の由来については、河口遺存より東興文化の方が古いことから、切り株形把手の退化したものという見方がある一方、河口遺存の乳状突起は東康文化の乳状突起を介して柳庭洞類型の突起に由来すると考える見方がある。ただし、後者の見方の場合、だから東康文化は柳庭洞類型に近いというのが¹⁴Cの補正年代と併せて従来の理解〔林1985〕であった。最近の河口遺存の発見により、東康文化との類似性を重視した場合、東



土器 1, 25, 26, 38, 39は1/16 他1/12
鉄・銅・石・骨器 37は1/12 他1/6

図5 滾兔嶺文化・鳳林文化の遺構と土器



1-9, 11-17は東康, 10は東昇, 21, 28, 30, 39, 48, 49は振興, 他は河口
15-17, 28-30, 39, 47-49は1/6 他は1/12

図6 牡丹江流域の遺構と遺物

康文化は河口遺存と同様に東興文化より新しい段階に位置づけられる可能性が説かれるようになった。この場合は未補正のままの樹輪較正值に近いことになるが、遺構や遺物の柳庭洞類型との連続性についての説明が難しいことに変わりはない。

下流域の河口遺存は住居の系譜は東興文化からで説明できるが、土器の変化はやはり柳庭洞類型－東興文化系統との接触無しには考えられない。東康文化の住居や土器・石器が柳庭洞類型の住居や土器・石器と系譜的につながっていると考えると、その間に住居や土器の系統の異なる東興文化あるいはそれに類似する土器文化が牡丹江中流域にまで広がったとは考えがたい。つまり、下流域が東興文化の段階にも中流域には柳庭洞－東康文化系統の文化がなければならぬから、下流域と中流域とはまったく異なる土器文化圏に属していたことになる。興城文化[大貫1998]は豆満江流域から牡丹江流域にかけて広がっていたから、その後延辺地区に柳庭洞類型が広がる頃にそれに近い土器群が牡丹江中流域にはあったと考えられる。その後、延辺地区を含む豆満江流域は団結文化に変化するが牡丹江中流域は連動せずに、柳庭洞類型の系統が残った。それゆえに柳庭洞類型の系譜の延長上に東康文化があるのだと考える。その後、河口遺存の段階では、南に位置する団結文化は終焉を迎えるため、それと連動していた東興文化が広がっていた地域は別の道を辿ることになった。中流域と下流域の土器は融合、接近して全体が柳庭洞－東康文化系統の土器になったのであろう。

もう一つの東興文化は切り株把手付きの甕に着目すれば団結文化の仲間である。団結文化期の頃、穆稜河流域にも団結文化が広がっていたことになっているが、そこには滾兔嶺文化の土器の要素も混じる遺跡がある。穆稜河流域と牡丹江下流域の間は山が途切れる地点であり、穆稜河流域を介して牡丹江下流域に団結文化の土器要素が入っているのである。このように、穆稜河流域の遺跡の内容が不明なのだが、東興文化にも滾兔嶺文化の要素と団結文化の様相が入っているのであるから、穆稜河流域の遺跡とは漸移的な変化を示す一連の仲間とも見える。方格文のようなポリツェ文化的な土器は松花江を介して入っているであろう。

これら切り株形把手と角状把手を指標として結ばれた段階を古段階として、層位的にそれらより新しいことが確認されている河口、鳳林を新段階として、夫餘と高句麗以東の地域に展開した考古学文化を大きく2段階に分ける(表2)。表2の古段階はポリツェ文化古段階1, 2期との同時性が考えられ、おおよそ漢代併行期となる。そして、ポリツェ文化の新段階におおよそ対応する新段階は従来から鳳林文化の年代として想定されている魏晋代、3世紀から4世紀前後で大きく動くことはなからう。従って、魏志東夷伝が記録した内容は新段階の初めか両者の移行期頃と言うことにな

表2 牡丹江、七星河流域の編年と地域性

	牡丹江中流	牡丹江下流	牡丹江河口部	七星河	沿海州南部
新	?	河口	?	鳳林	ポリツェ(沿)
	↑				
古	東康?	東興	橋南2	滾兔嶺	団結

る。

以上のような地域間の併行関係が正しいとすると、鳳林文化や沿海州のポリツェ文化新段階での祖形炕付き小型住居への変化のような大きな変化は同時期の牡丹江流域では起きなかった。高坏は中流域だけにあり、下流域には広がらなかった。甑は地域間の農耕化の程度を反映するかのようである。このような地域差の背景として上流域と豆満江流域との間を険しい山が遮っているため緩やかな連動性を示したが、他方、牡丹江下流域と穆稜河流域との間には開けた地域があり、そこを介して両地域はより密接な連動性を見せたと言えることが考えられる。

③……………挹婁の考古学

魏の軍隊は大海に沿って沃沮の地を北上して挹婁の南界に達したのであるから、沿海州のポリツェ文化こそが遭遇した挹婁にやはり相応しいと言えよう。険しい山の中に棲み、大海に沿って穴居するという記述も、アムール川中流域の平原部の遺跡よりも、沿海州に広がる、竪穴住居に住むポリツェ文化に相応しい。北は極まることを知らないというのも、アムール河口付近まで広がるポリツェ文化の分布に相応しい。

245年に魏軍が赴いた北沃沮の人々の住居は高句麗と同じなのだから平地住居であったはずである。だからこそ、挹婁が穴居する民としてとくに注意されたのである。したがって、245年には団結文化はすでに終わっていたのである。その団結文化を残した人々の内、豆満江流域の人々の後裔が245年の時の北沃沮の人々なのであろう。

冬は凍結するために船による沃沮への来襲がないということから、挹婁の船は海沿いに南下するのではなく、冬には凍結する川を利用して来襲したことになる。ポリツェ文化が南下する新段階では、綏芬河流域は団結文化からポリツェ文化に交替しているので、沃沮を襲撃するさいの川は豆満江になり、北沃沮はやはり豆満江流域に位置した可能性が高いことになる。

田中(2008)も買溝(北沃沮)を、豆満江をやや遡上した地点に注ぐ琿春河岸にある琿春市附近に比定している。この場合、挹婁は冬になれば結氷する豆満江を遡上して北沃沮を襲ったことになる。琿春河附近を越えてさらに上流の延辺地区にまで達した可能性もあろう。沿海州南部に広がるポリツェ文化オリガ類型の年代、および団結文化の下限年代を考えるならば、北沃沮の地は田中の考える琿春付近の方がより妥当であると考えられる。したがって、北沃沮と挹婁の沿海地域での境界は豆満江と綏芬河の間の地であると考えられよう。従来の団結文化の北半部の領域を失うというのは衰退を意味するようだが、南半部での平地住居化は生産力の上昇および高句麗との結びつきの強化を背景としているのであろう。そして、そのことが挹婁の南下を誘引したのではなからうか。

ポリツェ文化を挹婁が残したものとするのに大きな問題はないと考えるが、すでに上に述べてきたように、三江平原に滾兔嶺・鳳林文化が知られるようになり、また牡丹江流域ではより上流に東康文化、より下流に東興文化・河口遺存が知られるようになった。これら最近その様相が明らかになってきた七星河、牡丹江流域の諸文化、遺存は挹婁、沃沮という二分法に従うならばどちらかに帰属させるのか、あるいは未知の集団として独立させるべきかという再整理が必要になったのである(図1)。

魏志東夷伝では沃沮の北は挹婁と夫餘と接しているとする。また、夫餘は東を挹婁と接するとある。第2松花江流域を夫餘の地に、豆満江流域を北沃沮の地に比定した上で、この両者を満足させるには、七星河、牡丹江流域もまた挹婁の地とするのがもっとも理解しやすい。これらも北沃沮に組み入れ、挹婁をポリツェ文化だけに限定すると、夫餘との間が余りに開いて、互いに接するという状況ではなくなるし、これらを夫餘とするのはより困難だからである。

賈、魏（1989）のように、滾兔嶺文化をポリツェ文化と同じ挹婁系統とした場合、ポリツェ文化の広がるアムール川中流域は平坦な地であり、山城の多い滾兔嶺文化こそが東夷伝に記された挹婁の地に相応しいという理解も出てきているが、それは沿海州方面のポリツェ文化についての情報不足によるものであり、沿海州のポリツェ文化を排除すべき理由はない。実際に、東夷伝の内容は沿海州での見聞がおもになっていたのである。筆者〔大貫1998〕も以前、従来から知られていたポリツェ文化に加え、滾兔嶺文化も挹婁の有力な候補と考えていた。その後、鳳林文化の発見があり、白杵（2004）はポリツェ文化と滾兔嶺-鳳林文化などをポリツェ群として括り、おおよそ挹婁に対応する集団と考えた。

(1) 挹婁の指標

地理的な条件以外に、別の判断基準ではどうであろうか。東夷伝の中で、挹婁と隣接集団とを大きく分ける指標として東夷伝に出てくるのは、「穴居」すなわち竪穴住居であったこと、石鎌を用いていたこと、「豆」すなわち高坏を用いていなかったという考古学的に検証しやすい記事や、考古学的な検証がより難しい挹婁だけ言語が異なっていたという記事であろう。そのほか、農耕では五穀を産し、家畜ではブタの飼育が盛んで、ほかにウマ、ウシも飼っていたとある。また、大君長が無く、邑落毎に大人がいるという社会組織についての記事がある。竪穴住居はすべてに該当するので省略し、残りの条件から、牡丹江や七星河流域の諸文化、遺存が挹婁に含まれるのかどうかを検討する（表3）。

ア 五穀について

五穀とは何を示すのかというのは地域と時代によって異なる。江畑、井上（1974）が夫餘伝の注で、五穀の代表例7例を挙げているが、少なくともコメは外すべきであるから、残りは2例「黍」「稷」「麦」「麻」「豆（菽）」である。「黍」、「稷」はいずれも現在ではキビとされているが、天野（1979）によれば「稷」は現在ではキビの仲間とされているが唐代まではアワを指していた。したがって、東夷伝の五穀とはアワ、キビ、ムギ、マメ、アサであろう。団結文化の段階ではアワ、キビ、ムギのほか、ダイズやアサもわずかに見つかっている〔山田2005、小畑2008〕ので、五穀は揃っている。

ポリツェ文化では確実な資料がきわめて少なく、アワ、キビがあるが、新来の穀物であるムギがあるのか分からない。つまり、漢代から魏晋時代にかけて、団結文化の分布する北側に広がる考古学文化の中で実際に五穀が出揃っている例はないのである。

しかし、魏の軍隊は挹婁の南界に達しただけなので、そこで見た作物の種類が言及されているとしたならば、北は極まることを知らない挹婁の栽培穀物のすべてを語ることはならないし、逆に沿海州の南端部だけに作られていたと言うことを現在の考古資料から否定することも難しい。鳳林

文化の作物が不明だが、鉄製犁の存在からすればかなり発達していたに違いないから、より多種の穀物を作っていた可能性はある。しかし、偶然の遺存条件に左右される植物遺存体から五穀の有無を決定するのは難しいので、五穀の有無は挹婁に特定する条件とはならない。

ウマ、ウシが確実に揃っているのも、団結文化のみである。ウマは、滾兔嶺、アムール中流域ポリツェ文化2期から出ており、ウシは鳳林文化から出ている。ウマはウシより普及しているから、おそらく鳳林文化でも飼育されているとすれば、鳳林文化はウマ、ウシ条件を満たしそうだ。沿海州のポリツェ文化は動物骨の時期比定に問題があるので判断ができないが、その可能性を否定できるわけではない。

イ 高坏について

挹婁のみが「俎豆」を用いていなかったという。おそらく木製であろう俎はともかく、高坏(=「豆」)は検証可能な指標である。高坏の分布は古段階では図1において実線で示したラインの南側に限られる。したがって、高坏の有無を指標とすると、古段階ではポリツェ文化とともに東興文化、滾兔嶺文化には伴わない。新段階では滾兔嶺文化の後裔である鳳林文化に高坏が伴うようになり、高坏の分布は破線で示したラインまで北上する。ただし、牡丹江下流域の河口遺存には依然として知られていない。つまり、沿海州南部のポリツェ文化が挹婁の条件からはずれることになるという不都合な事態が生じ、新段階では河口遺存とアムール中流域のポリツェ文化のみが該当することになる。しかしながら、上で見たように、ポリツェ文化オリガ類型の食器様式の中で高坏の存在はきわめて希薄であり、定着することはなかったと考えられる。しかし、鳳林文化ではより定着していそうだ。滾兔嶺から鳳林文化への移行年代が厳密にはいつかは不明であり、高坏を伴わないというのは魏軍が沿海州で知った情報に過ぎず、すべての地域の状況を指していないという理解もありえるが、七星河流域を挹婁に含めるには難しい要素ではある。

ウ 青石の鏃と甲小札

石鏃では磨製と打製がある。色調まで書いている報告が少ないため分からないところがあるが、黒曜石の原産地である白頭山の近くなどでは打製石鏃に黒曜石を用いる場合があるほかは、おおむね石鏃には青色系統の石材が用いられているようだ。弓矢は挹婁にとって狩猟、戦争用としてなくてはならないものであり、発掘で出ていないから完全にないというのは例が少ない場合は危険を伴うが、一般には石鏃がなければより残りにくい鉄鏃か骨鏃が用いられていたと考えるべきであろう。

ポリツェ文化はアムール川中流域、沿海州とも石鏃があり、七星河流域では滾兔嶺文化にはあるが、鳳林文化にはない。牡丹江中下流域でも、東興文化にはあるが、河口遺存にはない。東夷伝に挹婁が記録された時代が古新の移行期まで遡れば多くの文化がこの条件を満たすが、新段階であればポリツェ文化に限られることになる。

夫餘や高句麗により近い地域から石鏃が消えていっていることは、やはり道具の鉄器化の進行度の反映なのであろう。それにもかからず、鉄製の小札が出ているのはアムール川中流域のポリツェ文化、滾兔嶺、鳳林文化であり、骨製小札はアムール川中流域のポリツェ文化と東康文化にある。牡丹江下流域や豆満江流域からは出ていない。これは鉄器化の進展度と言うより、武器をどれだけ

表3 諸文化, 遺存の主要組成対照表

文化名	段階	竪穴住居	高坏	甗	鎌	小札	鉄斧	石斧	鉄刀子	釣り針	農具	農作物	家畜	卜骨	その他
ポリツェ (アムール中)	古	○	X		鉄 磨石 打石 骨	鉄 骨	扇形2 条突帯		○	鉄	石鎌 すりうす	キビ	ブタ ウマ ヤギ		
ポリツェ (沿海州)	新	○ (祖形坑)	△	単孔	鉄 磨石	鉄?	○ 再生鑿		○			アワ	ブタ (ウマ ウシ?)		
滾兎嶺	古	○	X		鉄 磨石 打石	鉄					石包丁 すりうす	オオアサ	ブタ ウマ		打製削器
鳳林	新	○ (祖形坑)	○	多孔	鉄 骨	鉄	○			鉄	石包丁 すりうす 鉄犁		ウシ	ウシ	
団結	古	○ (祖形坑)	○	虎5 単孔	磨石 打石		板状	○			石包丁	アワ キビ オオムギ コムギ マメ	ブタ ウシ少 ウマ少	ブタ?	黒曜石
				虎6 多孔	鉄		袋状 再生鑿				鉄			石鉄包丁 鉄鎌 鋤先	シカ
東興	古	○	X	多孔	鉄 磨石 打石		○				石包丁 すりうす	アワ・キビ	ブタ?	ブタ?	
河口	新	○	X	単孔				○	○		石包丁 すりうす				
東康	新	○	○		鉄 磨石 打石 骨	骨					石包丁 石鎌 すりうす		ブタ ヒツジ?		

重視したかの差の反映のように見える。戦に強かった挹婁の条件にはより相応しい。

エ 邑落の大人

上で見てきたように、古段階のアムール中流域のポリツェ文化2期でも滾兔嶺文化でもとくべつ大規模な集落は知られておらず、また集落内の住居間格差も大きくはなく、顕著な階層化を認めることはない。滾兔嶺遺跡で円形の高台にある住居に住む人、あるいはポリツェI遺跡でもっとも大きな住居に住む人がそれぞれ邑落の大人なのかも知れない。沿海州南部のオリガ類型の集落も全体像は分からないが、やはり規模の格差は目立たず、魏志の記事と整合的である。

鳳林文化になると集落間の階層化が顕著になり、最末期には中心集落が出てくるようになるから、大君長のような人が出現していた可能性もあろう。だが、そうなるのは東夷伝時代より遅れる時代の可能性もある。周辺地域との緊張の中で、集落間の緩やかな連合が生まれ軍事を統率する指導者が必要になり、集落内、集落間の階層化を促したという想定もできよう [大貫1998:193]。ただし、続く靺鞨社会 [大貫1998:213～215] と同様に、それは一時的な緩やかなものであり、国家形成に向かうものではなかった。

オ 土器の系譜と挹婁の言語

考古学の資料から使用言語について判断するのは不可能に近い。それにもかかわらず、下に触れる三上(1966)が現在アムール川中・下流域や松花江流域に住む先住民族は南方ツングース語族であるが、彼らがその地に登場するのは靺鞨以後の最近のことであるとか、ロシアの研究者が靺鞨は北方から南下してきたツングース語族であるとか主張する中で、挹婁の言語はそれと異なる古アジア語族であるとする説がかつてあったため、筆者は考古学的資料から検討したことがある。そこでは、ポリツェ文化の土器の系譜が新石器時代の極東平底土器の地域性に求めることができ、周辺地域の土器の系譜とは異なることを述べた。その上で、アムール川中・下流域の土器はポリツェ文化から遼代パクロフカ文化まで民族の大移動を示唆するような大きな断絶はないことから、女真族の言語がツングース語であるなら、ポリツェ文化もその系統であったと考えるのがもっとも素直であり、古アジア語族とする根拠はないとした。そして、東夷伝が挹婁のみが異なり、夫餘、高句麗、沃沮の言語が近いとしているのは、新石器時代以来の地域的な枠組みに由来するのであろうと述べたことがある [大貫1998:195～197]。

その後、白杵(2004)が新石器時代以来紀元前後に至る集団間の関係を多少は反映するだろう土器の系譜関係をより詳細にまとめている。筆者の理解と大きく異なるところはないので、詳細はそれにゆずる。

ただ、ここで問題となる挹婁の言語の範囲を考える場合には、もちろん土器の系統が言語の系統とそのまま対応するとは考えないが、前一千年紀の牡丹江流域の土器はどちらかと言えば、元来の系統としてはポリツェ文化よりは団結文化の土器との関係が強くポリツェ文化と同じ言語を話していたと結論するのは躊躇するのである。七星河流域の土器は牡丹江流域より団結文化との結びつきが弱い、かといってウリル-ポリツェ文化の土器の系譜とは異なる。鳳林文化にはポリツェ文化の土器の搬入品らしきものがあるから、まったく無交渉ではなかったが、そのことをもって、積極

的にポリツェ文化の言語に似ていたろうとは考えにくい。

カ 挹婁の範囲

以上に見てきた諸条件では、夫餘から近いアムール川中流域や北沃沮と接していたと考えられる沿海州南部のポリツェ文化が魏志東夷伝に記録された挹婁の条件にもっとも適合することはその当時の情報源を考えても納得できるところであろう。それに次ぐのが七星河流域の滾兔嶺文化である。鳳林文化はかなり条件から外れる。そして、牡丹江流域の諸文化、遺存はもっとも挹婁的な色彩が薄い。七星河流域の大きな集団が東夷伝に記録されなかったとは考えられないから、言語では折衷を認めずあくまでも二者択一を迫るのであれば、夫餘や北沃沮に属して挹婁と争っていたというよりは挹婁の仲間であろう。しかし、鳳林文化に移行するにつれて、ますます魏志東夷伝に記された挹婁の条件から遠のいているのも事実である。とても、その後さらに鞮鞞としてまとまっていくようには見えない。

牡丹江流域が挹婁に属するのであれば、夫餘との戦いでは最前線に位置することになるが、集落には城壁も築かず、武器も発達せずそのような状況を見ることもない。土器の系統からは牡丹江流域はより北沃沮に近いように見えるが、穴居する点など東夷伝の時代の北沃沮とは明らかに異なる。未知の集団として排除するよりも牡丹江流域についてはいまだよく分からないとしておきたい。当時の人々がどのように他者集団を括っていたかは今からでは分からない部分がある。

(2) 東北アジアの交通と交易

鳳林文化の豊富な鉄器は牡丹江流域から入ったのであろうか。しかし、牡丹江流域の鉄器あるいはそれと表裏の関係にあるはずの石器の出方を見るかぎり、牡丹江流域が夫餘から三江平原に鉄器が入る中継交易を担っていたとは考えにくい。清朝の時代、松花江流域の赫哲族は貂の皮などを持って船で松花江を遡り三姓（現在の衣蘭 牡丹江との合流点）まで出かけ、穀物、布、塩などを手に入れていた。往復に一ヶ月かかったという〔《民族問題五種叢書》黒龍江省編輯 1987：85〕。次の勿吉も北魏へ赴くのに松花江、嫩江を船で移動していたように、船での河川交通が重要な役割を果たしていた。また、挹婁がしばしば北沃沮を船に乗って襲撃したという記事からも、挹婁にとって船による河川交通が重要な役割を果たしていたことが分かる。

夫餘との抗争、夫餘の衰退は三江平原以北の鉄器供給に大きな影響を与えたに違いない。夫餘は挹婁と漢魏の間の交易上大変重要な役割を果たした。おそらく夫餘自身漢魏から鉄製品や布などの品物を得るための交換材が必要であり、馬、貂などの毛皮、赤玉が有名であった。これらは夫餘に限らず挹婁からも調達することができるもので、その調達が厳しいことが黄初年間（220～226年）の挹婁の夫餘からの離反につながったのである〔日野 1988〕。このようにして夫餘から離反した挹婁がその後どこから鉄製品を入手したかは興味あるところであり、もっとも可能性が高いのはこの時期東夷の強国の一つである高句麗であろう。

『晋書』肅慎一名挹婁伝によれば、魏軍が245年に挹婁の南界に至る以前、それまで夫餘を介するのみで直接秦漢王朝と接することの無かった集団「肅慎」が236年に魏に初めて入貢し、その後も魏、西晋に石製の矢尻の付いた矢と弓、(皮革・骨製の)甲、貂皮をもって入貢した。すでに見

たように、第2松花江流域以東、豆満江流域以北に展開していた考古学文化を残した集団で遅くまで石鏃を残すのが明らかなのはポリツェ文化であり、西晋時代の「肅慎」の候補は鳳林文化よりはポリツェ文化である。

日野（1988：381）はこの肅慎はすでにこの時期夫餘と対峙していた集団のはずだから、その集団は牡丹江流域に住んでいたと推定している。しかし、魏晋時代の3世紀における遺跡の分布から考えると、牡丹江流域にそのような強力な集団がいたとは考えにくい。七星河流域の鳳林文化、沿海州南部のポリツェ文化などが想起されるが、これらの集団であれば、あえて敵対する夫餘の地を経ず、北沃沮から高句麗の地を経由したという日野（1988：151）の理解が正しいのであろう。

そして、北方では同仁文化になっても石器利用は続く。このような南北の差異は、沃沮が鉄器供給地となりうる玄菟郡、楽浪郡、高句麗とつねに密接な関係にあったという歴史的な条件が反映しているのであろう。とくに、高句麗は沃沮の一部として北沃沮を属領化していた。そして、北沃沮でも毛皮や海産物を徴収される代わりに鉄器を始めとする様々な文物がもたらされ、魏軍が侵攻した頃にはすでに南沃沮と変わらない社会になっていたのであろう。

ポリツェ文化の時代でもウスリー川流域や沿海州南部ではポリツェ文化内に中継点があったとしても鉄器の入手は容易ではなかったろうし、沃沮と敵対する関係にあったとすればなおさら別に鉄器の入手経路として、北沃沮を介し高句麗と接触する必要があったのではなかろうか。それがしばしば北沃沮を襲撃して物品を奪うだけの関係であったろうか。高句麗と挹婁を結ぶ中間交易的な平和的な交易もあったのではないかという日野（1988：152）の推測も捨てがたい。鳳林文化もまた北沃沮を経由して高句麗から入手したのではなかろうか。

④……………付論

(1) 挹婁—古アジア語族論の再検討

三上（1966）にはその後の魏志挹婁伝の理解に強い影響を与えた挹婁についての研究がある。ここでは、毒矢、人尿使用、地下式住居が東北アジア北方に広がる古アジア語諸族の習俗と共通することをおもな根拠にして、挹婁、勿吉、靺鞨の古アジア語族説が主張され、一時期大きな影響力を持ったようである。これが成り立たないことは以前に〔大貫1998〕も触れたが、論拠の中核をなす住居について簡単に触れておく。

三上（1966）は挹婁の堅穴住居の深さを「九梯」と表現していることに着目し、とくに深く掘り込んだ地下式で天井出入り式の住居を想定した。そして、民族誌時代の住居の中で、アリユート、コリヤーク、カムチャダールなどの古アジア語諸族の家に見られる特徴であると述べる。これらの住居は地表にはほとんど出ることのない地下式で、多人数が住めるだけの大きな床面積を有するという特徴がある。他方、ツングース語族の民族誌に見られる堅穴住居は、浅い掘り込みで屋根が塚状に盛り上がり、横方向から出入りする半地下式の家であり、言語の違いに対応して大きく二種類の堅穴住居があることに注目している。そして、魏書勿吉伝・隋書靺鞨伝では堅穴住居について、入り口を上を開き梯子で出入りすると記載されていることから、古アジア語諸族の住居の系譜につ

ながる天井出入り式と見なし、それに先行する挹婁の九梯の堅穴住居もこの系譜に属すると見なし。さらに、現在の古アジア語諸族の南限はアムール川では河口域に住むニヅヒ（＝ギリヤーク）であり、その民族誌時代の堅穴住居は小型の半地下式で横方向出入り式であったが、それは最近の変容に過ぎず、より古くは天井出入り式の地下式住居であったと見なす。そして、かつては天井出入り式の地下式住居はさらに南まで広がっていたのであり、それが挹婁、勿吉、靺鞨の堅穴住居であり、そのことは彼らが古アジア語諸族であったとの結論にまでいたる〔三上1966〕。その後彼らはアムール川河口付近まで北に向かって後退し、代わりに現在ではツングース語族の人々がアムール川下流域に住んでいると考えたのである。

三上が引用した古アジア語諸族の住居はまさに地下式の住居であるが、上に見てきたように実際に発掘されたアムール川中下流域、沿海州の堅穴住居は地表に屋根をかぶせ塚状になった半地下式住居であり、三上の二分法に従えば、アムール川下流域における民族誌時代のツングース語族の堅穴住居や魏書勿吉伝に記された塚に似る家と同じ仲間である。屋根をかぶせただけで壁のない半地下式住居の場合、どうしても屋根の一部から出入りするしかないからある意味では天井出入り式ではある。そのため、後の勿吉、靺鞨についての史書の記載を天井頂部出入り式と解することがある。しかし、たとえば我が国の古代の堅穴住居に出入り口施設が見つかることは少ないが、それを即天井頂部出入り式のためと考える研究者はいないだろう。かならずしも屋根の頂部に出入り口がある必然性はなく、屋根の裾部分から出入りしたと考えたほうが、発掘されている住居の一部（ポリツェ I 8号住、蜿蜒河2号住）に実際に門道があることもとも符合する。最近、中国でも天井頂部出入り式に反対する見解が出ている〔憑2007〕。

現在の考古学資料から見た場合大きな民族移動を認めることはできず、古アジア語族がかつてはアムール川下流域や松花江流域に住んでいたということはできないのである。

(2)「溷」—人尿利用とブタ便所

魏志挹婁伝には「其人不可潔，作溷在中央，人圜其表居。」とある。「溷」という文字は、後漢書では「厠」になっている。この記事について、八木（1936）は『満蒙民族誌』で、「溷」は厠であり、それを家の中の中央に設けて、その周りに人が住むとするが、夏に家の中にあっては余りに臭く耐えられないだろうから、屋外での用便が厳しい厳冬期だけの特別のことと考えている。

その後、三上（1966）がこの「溷」を小便溜と解し、東北アジアにおける、その後の勿吉、靺鞨伝に見える人尿利用の記事、あるいはさらに民族誌時代に至る東北アジアでの人尿利用の習俗を集成し、その人尿利用の歴史が挹婁まで遡ることを明らかにしたことはよく知られている。

筆者も以前からこの記事に関心を持ち、「溷」が堅穴住居内の中央にあったということが考古資料からうかがえるか注目してきた。たとえば、それが常設便所なら、挹婁の住んでいた堅穴住居では床の中央に穴が掘られていてもよさそうだが、上で見てきた各考古学文化の堅穴住居にはそのような穴を見ることはない。したがって、何らかの施設が室内の中央にあったとしたら、それは床面上に設置されていたことになる。しかし、ポリツェ I 遺跡のような住居では中央に炉があるからそれも考えにくい。すでに見てきたように、漢代併行期の古段階にはポリツェ I 遺跡や滾兔嶺遺跡のように大型の住居があり屋内に広い空間があるが、魏軍が遭遇したであろう沿海州南部の例を含め

新段階の住居はどこでも小型化している。その中央に恒常的な固定便所施設があったとは考えにくいのである。三上が特に人尿利用としての小便溜として、人糞と区別していることが重要であろうと考える。人尿利用のためには床にただ穴を掘った便所では人尿が地下に浸透してしまうので役に立たない。

三上が引く、鳥居（1976：238）が紹介するコリヤーク族の例では、夜間には用便のために屋外に出ず、屋内に木を削り抜いた便器があると紹介されている。最近の都市部でも便桶を部屋の中に置いていたことは聞く話である。人尿利用のためには、小使用と大使用の容器を分けねばならず、屋内に常に設置されていなければならないのは小便溜であった。大使用の便器は屋内にあったとしても、常時固定設置されていたとは考えにくい。

『説文解字』では「圂」は「豕廁」（ブタ便所）とあり、「溷」は「乱」とある。段注には「人廁」のことを「圂」と言い、俗に「溷」とも書くという。

ブタ便所については、西谷（2001）による詳しい研究がある。ブタ便所は漢代明器によく見られるもので、ブタの餌として人糞を利用することを兼ねた便所であるが、漢代から肥料の生産を目的としていたかは不明であるという。後漢後期には北は北京付近まで分布を広げている。ブタ便所は冬季にブタを屋内で飼育するという目的に適していた。遼西、遼東郡の漢墓では明器の副葬が発達しないため、ブタ便所がどこまで普及したか証拠はないが、これだけ漢代に普及した人糞利用が遼西、遼東郡に広がらなかったとは考えにくい。さらに、ブタ飼育への人糞利用はさらに北に広がってもおかしくはないが、それが屋内ブタ便所となることはなかったであろう。

漢の世界では人糞利用がブタ便所「圂」の大きな目的であった。しかし、挹婁では、屋内「溷」の大きな目的は人による人尿利用であり、ブタを堅穴住居内で飼育するためではもちろんなかった。だから、魏軍の人には珍しい習俗として記録されたのであろうが、そのためにさんずいが付いているのではないかというのは考えすぎであろうか。

(3) 「鬲」と日本列島出土の袋状三足器

ついでに、晋書肅慎一名挹婁伝に「瓦鬲」という土製容器の名前が出てくることに触れておく。同じ「瓦鬲」という容器は魏志沃沮伝の中にも出てくる。日本列島の縄文時代晩期の東北地方北部にまれにある袋状三足を持つ土器が中国の鬲を模倣したものであるという説を主張する際に、日本海を挟んだ対岸の沃沮には紀元後も袋状三足を持つ鬲があったことをその根拠の一部としている。沃沮や肅慎の「鬲」は袋状三足の器を指すものではないことは筆者〔大貫2002〕も以前指摘したことがある。

(4) ト骨

北アジアでは中国の華北畑作農耕社会での出現が古く、遼西では紀元前二千年紀にウシ、ブタ、ヒツジなどの家畜の肩胛骨を用いたト骨が普及し始める。極東東部では、紀元前一千年紀の柳庭洞類型（ヒツジ円形杓、ブタ円形杓）の頃に現れ、団結文化（シカ円形杓）、東興文化（ブタ鑽）、鳳林文化（ウシ円形杓）につながる〔新田1977〕（表3）。おもに家畜の肩胛骨を用いたト骨が畑作農耕文化複合の一部として東漸したことがうかがわれる。ポリツェ文化の遺跡からト骨が見つかって

いないのは、逆に農耕や家畜の普及が遅れていたことを反映していると考えられるかも知れない。

古段階の貯蔵穴の底や住居床面に置かれたブタの下顎骨が置かれて見つかるのもこのような精神文化を構成する動物儀礼の到来を示すのであろう。ただし、極東地域には新石器時代に遡る狩猟動物儀礼が基層としてあり、それを覆うようになっているので動物儀礼をすべて農耕文化の到来と結びつけるのは注意が必要である [大貫 1998]。

他方、魏志倭人伝では日本列島でも占卜がおこなわれていたと記されているが、その卜骨の3分の2以上は野生獣であるシカであり、日本列島への稲作伝播ルートと考えられている、山東半島の岳石文化、遼東半島の双砬子3期文化でもシカを卜骨(鑽)に用いる習俗があり、その共通性が注目されているところである [岡村 2005]。金関(1975)らが考えたように農耕文化の一部として中国から朝鮮半島を経て日本列島に入ったのであろう。水田稲作農耕とシカなどの野生狩猟獣、畑作雑穀農耕とブタ、ウシなどの家畜という文化複合のそれぞれの組合せに対応するものなのであろうか。

日本列島の卜骨がシカを主とすることから、ツングース語族の狩猟採集文化に由来するという説もあった。北方の狩猟採集民ツングース語族の間に卜骨の習俗広がっていたことはよく知られている。それらに鑽はなく、もちろん点状杓でもなく、火で骨を焼くことによる [新田 1977]。三江平原の赫哲族も同様に狩猟獣ノロの肩胛骨を焼いて卜っていた [凌 1934]。これが紀元前一千年紀に極東東部に達した農耕文化に伴う卜骨の退化した姿なのか、あるいは別の系譜に属するのかどうかは中間の空白を埋める資料がないため判断できないが、北方狩猟採集文化の卜骨が弥生時代の日本列島に入ったということにはならない。

本稿を草するに当たって、資料収集で以下に記す方々のお世話になりました。白杵勲、福田正宏、石丸あゆみ、金恩瑩(敬称略)。記して感謝いたします。

註

(1)——田中 2008 に従い、「母丘儉」とする。

(2)——同仁文化という用語はロシア側の考古学文化名「靺鞨文化」に対応するものとして菊池(1988)が最初に用い、筆者 [大貫 1998] もそれを使っている。当初中国では、「靺鞨文化」に対応する段階を同仁一期文化、同仁二期文化という二つの文化に分けて命名しており、「同仁文化」という文化設定はしていないことが問題と

なった [白杵 2004]。ところが、最近中国でも、同仁文化一期、二期という記載が始まり、「同仁文化」という文化名が登場するようになった。靺鞨文化と一対一で対応する便利な「同仁文化」の使用に反対する最大の理由はなくなった。考古学文化の設定は所詮便宜的であり、使うのに便利な方がよい。

参考文献

- 東 潮 1997 『高句麗考古学研究』吉川弘文館。
 東 潮 1999 『古代東アジアの鉄と倭』溪水社。
 天野元之助 1979 『中国農業史研究(増補版)』御茶の水書房。
 白杵勲 1995 「オリガ文化の問題」『物質文化』58, 20-31頁。
 白杵勲 2001 「ウスリー江流域の鉄器時代遺跡を訪ねて」『北方ユーラシア学会会報』14, 10-13頁。
 白杵勲 2004 『鉄器時代の東北アジア』同成社。
 江畑武・井上秀雄訳注 1974 「三国志余伝」『東アジア民族史1』49-57頁。
 大貫静夫 2002 「袋足のない鬮」『東京大学考古学研究室紀要』17, 69-78頁。

- 大貫静夫 1989 「極東における平地住居の普及とその周辺」『考古学と民族誌』146-171頁。
大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』同成社。
大貫静夫 1995 「環渤海初期雑穀農耕文化の展開」『東北アジアの考古学研究』144-172頁。
大貫静夫・佐藤宏之編 2005 『ロシア極東の民族考古学』六一書房。
大貫静夫編 2007 『遼寧を中心とする東北アジア古代史の再編成』東京大学大学院人文社会系研究科。
岡村秀典 2005 「ト骨の変化」『中国古代王権と祭祀』127-140頁。
小畑弘己 2005 「考古学からみた極東地方のムギ類の伝播について」『極東先史古代の穀物』81-101頁。
小畑弘己 2008 「種実資料からみた北東アジアの農耕と食」『極東先史古代の穀物3』183-211頁。
加藤晋平 1980a 「北方農耕覚え書(9)」『どるめん』24・25, 213-222頁。
加藤晋平 1980b 「ソ連邦極東南部地区」『三世紀の考古学(上)』272-296頁。
金関丈夫 1995 「ト骨談義」『発掘を推理する』69-93頁。
佐藤宏之編 1998 『ロシア狩猟文化誌』慶友社。
田中俊明 2008 「魏の東方経略をめぐる問題点」『古代武器研究』9, 6-15頁。
鳥居龍蔵 1976 「極東民族」『鳥居龍蔵全集7』99-317頁。
中村嘉男 1975 「解説」『シベリア・極東の考古学1』467-510頁。
西谷 大 2001 「豚便所」『国立歴史民俗博物館研究報告』90, 79-149頁。
新田栄治 1977 「日本出土ト骨への視角」『古代文化』29-12, 27-42頁。
野島永 1992 「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』32・33, 20-30頁。
日野開三郎 1988 「沃沮考」『東洋史学論集14』99-179頁。
三上次男 1966 「挹婁人の民族的性格とその社会」『古代東北アジア史研究』223-330頁。
村上恭通 1987 「東北アジアの初期鉄器時代」『古代文化』39-9, 1-25頁。
村上恭通 1994 「弥生時代中期以前の鑄造鉄斧」『先史学・考古学論究』71-85頁。
村上恭通 1995 「東アジアから見た弥生の鉄文化」『弥生の鉄文化とその世界』北九州市立博物館。
村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店。
村上恭通 2000 「団結文化と滾兎嶺文化」『東夷世界の考古学』103-126頁。
八木契三郎 1936 『滿蒙民族誌』滿鉄経済調査会。
渡辺仁 1984 「竪穴住居の廃用と燃料経済」『北方文化研究』16, 1-41頁。
オクラドニコフ, ア. ベ・グリンスキー, エス. ヴェ.・メドヴェヂェフ, ヴェ. イェ 1982 「スウチャン流域ナ
ホトカ市のそばのプロチカ古代集落址の発掘」『シベリア極東の考古学2』285-294頁。
クラードン・クリューエフ・ニキーチン(大貫静夫訳) 2001 「イマン川流域における古代社会の居住形態につ
ての予報」『北方ユーラシア学会会報』15, 18-31頁。
セルグシェワ, E. A. 2005 「古民族植物資料に基づく沿海州考古遺跡における栽培植物について」『極東先史
古代の穀物』43-48頁。
デリューギン・ヴァレリー 2008 「古代アムール川流域・環オホーツク海における社会文化的適応プロセス研究」
東京大学大学院博士学位論文。
プロジャンスキー, デイ. エリ. 2000 「ロシア沿海地方の初期鉄器時代」『東夷世界の考古学』127-177頁。

〈朝文〉

- 金一圭 2006 「漢江中・下流域の中島式土器編年小考」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』445-463頁。
金度憲 2002 「三韓時期鑄造鉄斧의流通様相에對한檢討」『嶺南考古学』31, 1-29頁。
黄基徳 1970 「茂山虎谷遺蹟発掘報告」『考古民俗論文集』124-226頁。

〈中文〉

- 賈偉明・魏国忠 1989 「論挹婁的考古学文化」『北方文物』1989-3, 24-29頁。
吉林集安県文管所 1982 「集安万宝汀墓区242号古墓清理簡報」『考古与文物』1982-6, 16-19, 28頁。
吉林省文物考古研究所編 1987 『榆樹老河深』文物出版社。
靳維柏・王学良・黄星坤 1999 「黒龍江省友誼県鳳林古城調査」『北方文物』1999-3, 17-22頁。
黒龍江省佳木斯市文物管理站 2002 「黒龍江樺南県小八浪遺址の発掘」『考古』2002-7, 37-48頁。
黒龍江省博物館 1975 「東康原始社会遺址発掘報告」『考古』1975-3, 158-168頁。

- 黒龍江省博物館・中国社会科学院考古研究所 2006「黒龍江省綏濱県蜿蜒河遺址発掘報告」『北方文物』2006-4, 12-20頁。
- 黒龍江省博物館考古部・哈爾濱師範学院歴史系 1983「寧安県東康遺址第二次発掘記」『黒龍江文物』1983-3, 158-168頁。
- 黒龍江省文物考古研究所 2000a「黒龍江友誼県鳳林城址1998年発掘簡報」『考古』2000-11, 24-34頁。
- 黒龍江省文物考古研究所 2000b「黒龍江友誼県鳳林城址二号房址発掘報告」『考古』2000-11, 35-41頁。
- 黒龍江省文物考古研究所 2003「黒龍江双鴨山市保安村漢魏城址の試掘」『考古』2003-2, 24-33頁。
- 黒龍江省文物考古研究所編 2004『七星河-三江平原古代遺址調査与勘测報告-』科学出版社。
- 黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古系 1996「黒龍江海林市東興遺址発掘簡報」『考古』1996-10, 15-22頁。
- 黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系編 2001「河口与振興-牡丹江蓮花水庫発掘報告(一)-」科学出版社。
- 鄒哈 2006『黒龍江鶴崗地区古代文化遺存』黒龍江人民出版社。
- 寧安県文物管理所 1977「黒龍江省寧安県東昇新石器時代遺址調査」『考古』1977-3, 173-175頁。
- 白雲翔 2005『先秦兩漢鉄器の考古学研究』科学出版社。
- 万欣 2006「喇嘛洞鉄工初論」『東アジア考古学論叢』317-334頁。
- 楊虎・林秀貞 2006「試論蜿蜒河類型与波爾采文化的關係」『北方文物』2006-4, 21-27頁。
- 憑恩学 2007「黒龍江中游沿岸地区の靺鞨房屋」『边疆考古研究』6, 274-289頁。
- 李硯鉄・劉曉東・王建軍 2000「黒龍江省衣蘭県橋南遺址発掘及相關問題」『北方文物』2000-1, 1-9頁。
- 遼寧省文物考古研究所 2004「遼寧北票喇嘛洞青銅時代墓葬」『文物』2004-5, 26-30頁。
- 凌純声 1934『松花江下游の赫哲族』(影印版 1990 上海文艺出版社)。
- 林溪 1985「論團結文化」『北方文物』1985-1, 8-22頁。
- 林溪 1986「肅慎、挹婁和沃沮」『遼海文物学刊』1986-1, 54-57頁。
- 《民族問題五種》黒龍江省編輯組 1987『赫哲族社会歴史調査』黒龍江朝鮮民族出版社。

〈露文〉

- Андреева Ж.В. 1977 Приморье в эпоху Первобытнообщинного строя.
- Андреева Ж.В. отв.ред. 2002 Синие Скалы, Владивосток.
- Болотин Д.П.1999 Проблемы генезиса Михайловской культуры Приамурья, Традиционная культура Востока Азии, 2, 109-120.
- Бродянский Д.Л. 1987 Введение в Дальневосточную рхеологию, Владивосток.
- Деревянко, А.П. 2000 Польцевская культура на Амуре, Новосибирск.
- Деревянко А.П. 1973 Ранний железный век Приамурья, Новосибирск.
- Деревянко А.П. 1976 Приамурье (I тысячелетие до нашей эры), Новосибирск.
- Коломиец С.А., Афремоф П.Я., Дорофеева Н.А. 2002 Итоги Полевых Исследований Пмятника Глазовка-Городище, Археология и культурная антропология Дальнего Востока, 142-155.
- Окладников А.П. 1959 Далекое прошлое Приморья, Владивосток.
- Окладников, А.П., Бродянский Д.Л. 1984 Кроуновская культура, Археология юга Сибири и Дальнего Востока, 100-114.

(東京大学大学院人文社会系研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2008年12月22日審査終了)

The Yilou Archaeology

ONUKE Shizuo

The Weizhi Dongyizhuan (*Accounts of the Eastern Barbarians in the History of the Kingdom of Wei*), describes the Yilou as a group living northeast of Fuyu and north of Woju in the land furthest from Wei. The archaeological culture left by the Fuyu is thought to have been the Middle Laoheshen culture that spread in the Second Songhua River basin during the Han period and the majority of opinion places Northern Woju in the Tuanjie culture that spread along the Japan Sea coast from the southern part of the Maritime Province (Primorskii krai) to the Tumangang River basin. In the Han period, the Yilou were outside these areas. From the Han period through the Wei-Jin period they lived in pit dwellings, and from the perspective of their not having pedestal bowls, the archaeological culture known to coincide with the archaeological conditions of the Yilou is the Pol'tse culture that extended from the middle and lower reaches of the Amur River (Heilong River) on the Russian side to the Sanjiang Plain that partially falls within China. With limitless land to the north and extending to the Maritime Province on the Japan Sea coast to the east, of the archaeological cultures known of today, Pol'tse culture, which spread as far as the mouth of the Amur River and to the Japan Sea coast, is still the most appropriate in geographical terms even today. At this new stage, this Pol'tse culture extended to the southern part of the Maritime Province. In stratigraphic terms as well, it was newer than Tuanjie culture. The text on the Yilou's occasional assaults on the Woju contained in the section on Woju in the Weizhi Dongyizhuan most probably reflects the situation at this time. However, it is necessary to partially modify the general view of dates in Russian archaeology. Recently, from an investigation undertaken of the Han-Wei period in the Mudan River basin and the Qixing River Basin situated east of the Second Songhua River basin and north of the Tumangang River basin, it has been discovered that cultures that were not the same as the Pol'tse culture developed in those areas. It is not easy to place these within the Weizhi Dongyizhuan. That is to say, when considering only the conditions of the Yilou as written in the Dongyizhuan, it is the Pol'tse culture which is the most fitting of known archaeological cultures, followed by the cultures of the Qixing River basin, with the cultures and relics of the Mudan River basin the most distant. However, it doesn't mean that these formed part of the cultures that succeeded Woju or Fuyo. Rather than being a simple positional relationship reconstructed from the writings in the Weizhi Dongyizhuan, it is actually far more complicated.

Keywords: Yilou, Han-Wei period, iron tool, pit dwelling, Pol'tse culture
